

# 羽田 闘争

10・8→11・12と共産主義者同盟

戦旗社

## I 闘いの記録

- |    |                 |    |
|----|-----------------|----|
| 1. | 10・8 羽田闘争       | 1  |
|    | 山崎君の虐殺          | 9  |
|    | 10・8 闘争の国際的反響   | 12 |
| 2. | 10・8 から 11・12 へ | 14 |
|    | 10・13 反戦統一行動    |    |
|    | 10・21 国際反戦闘争    |    |
|    | 11・9 沖縄返還中央集会   |    |
| 3. | 11・12 羽田斗争      | 19 |

## II 共産主義者同盟の方針と総括

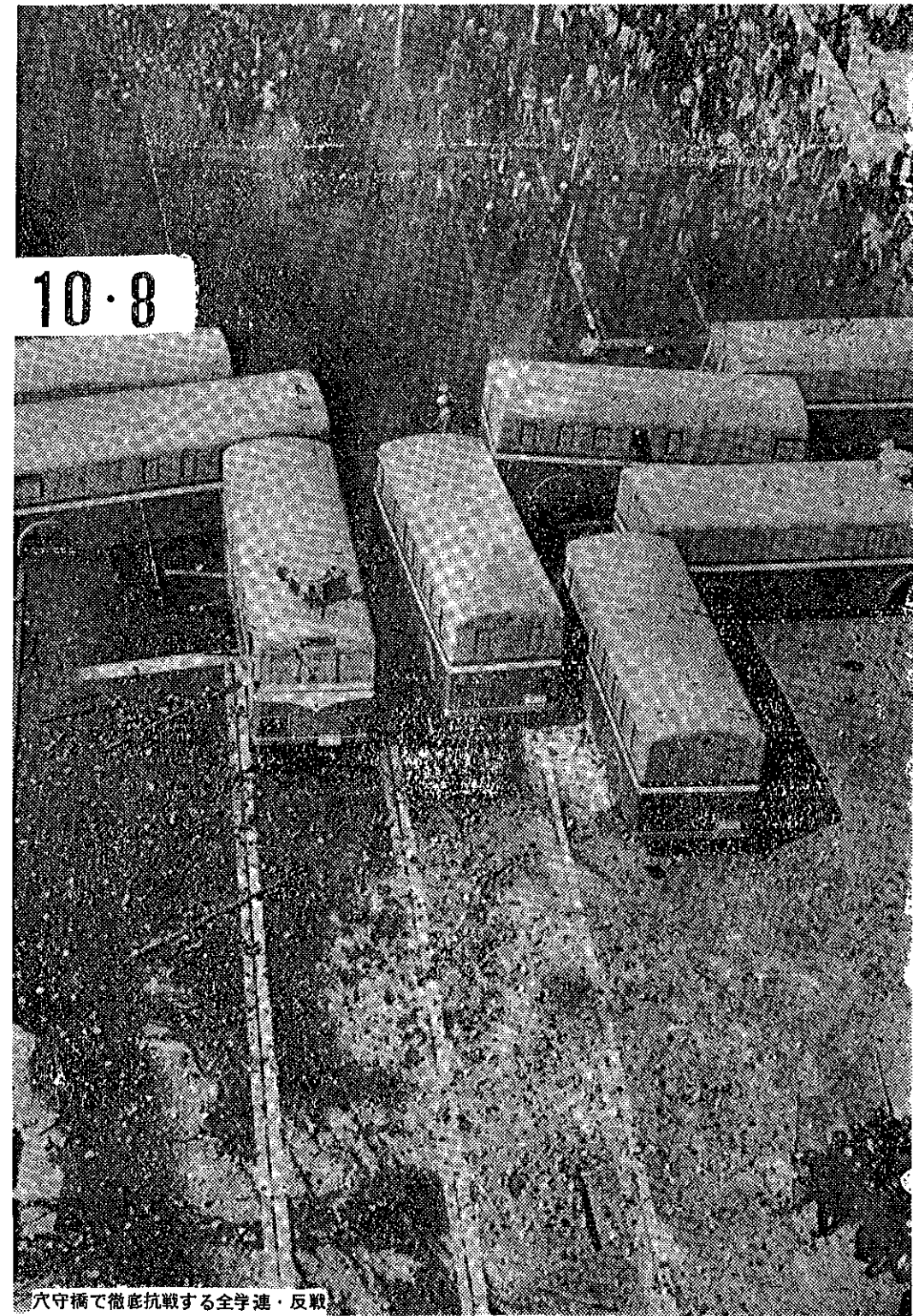
- |    |                 |    |
|----|-----------------|----|
| 1. | 10・8 羽田闘争への方針   | 31 |
|    | 10・8 羽田闘争の総括    | 37 |
|    | 共産主義者同盟声明       |    |
| 2. | 11・12 羽田闘争への方針  | 47 |
|    | 11・12 闘争と社会党・日共 | 54 |
|    | 11・12 闘争の総括     | 59 |

## III 理論的諸問題

- |    |                      |    |
|----|----------------------|----|
| 1. | 70年安保=日米反革命同盟の強化を許すな | 71 |
| 2. | 沖縄問題と沖縄階級闘争の新たな段階    | 78 |
| 3. | 帰揚局面むかえる世界階級斗争       | 83 |



10・8



六守橋で徹底抗戦する全学連・反戦

11  
12

# 佐藤訪米阻止闘争

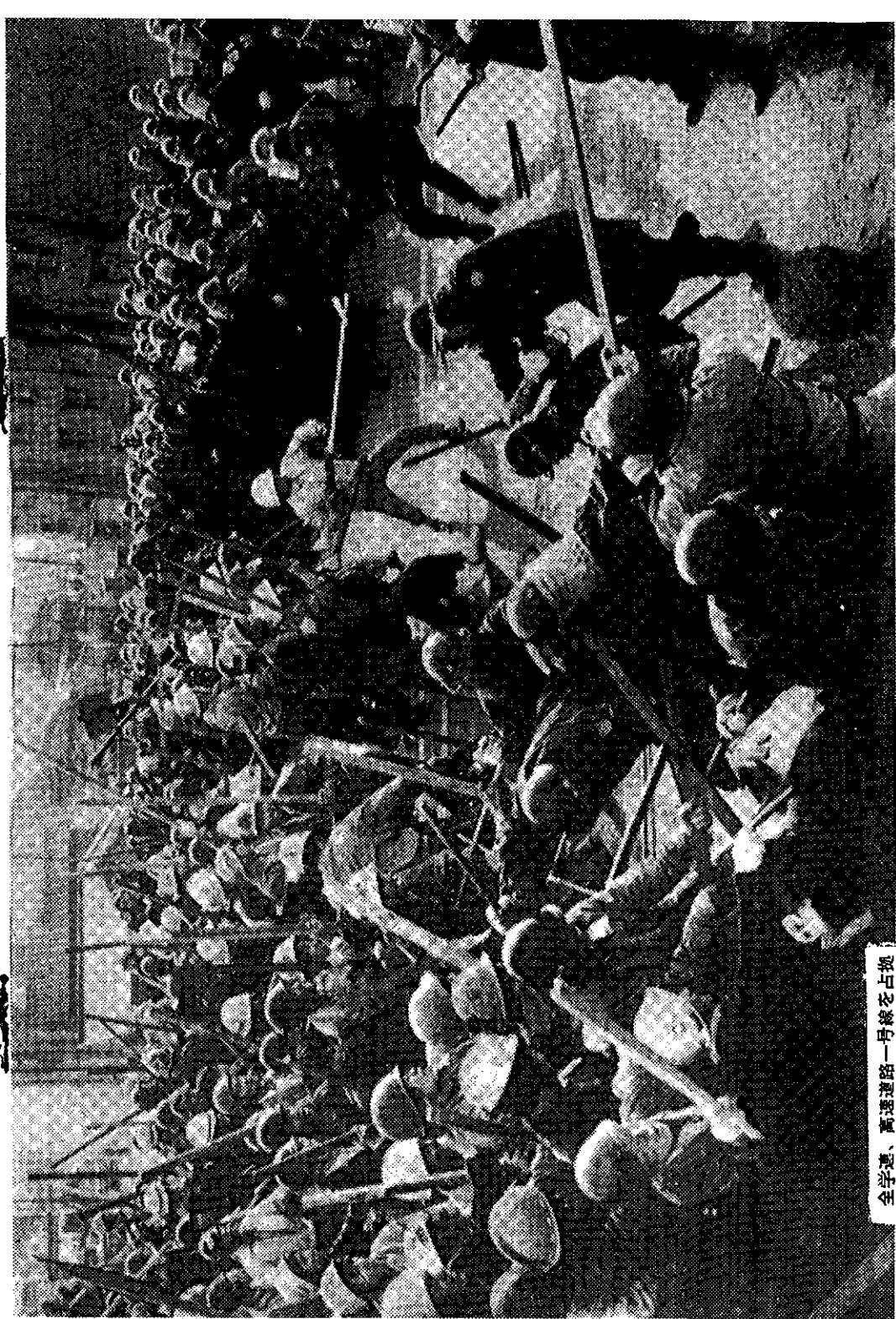
日の出通りを大鳥居羽田空港へ向う全学連



↓産業道路上で機動隊と対峙する反戦のデモ隊



(←次頁) 機動隊の如石ネットをのりこえ前進する全学連 (大鳥居駅付近)



全学連、黄線を一時的に占拠

## 闘いの記録

佐藤訪ベト＝侵略加担に巨大な打撃

# 全学連反戦五千闘いぬく

## 官憲の虐殺・大弾圧を突破

△高速道路を占拠

全学連、戦端を切り開く！

佐藤ベトナム訪問阻止羽田闘争の戦端は、十月八日朝7

時50分、大森海岸駅頭の羽田行高速道路で切り開かれた。

全国から結集した約一三〇〇名の先進的學生は、早朝中央

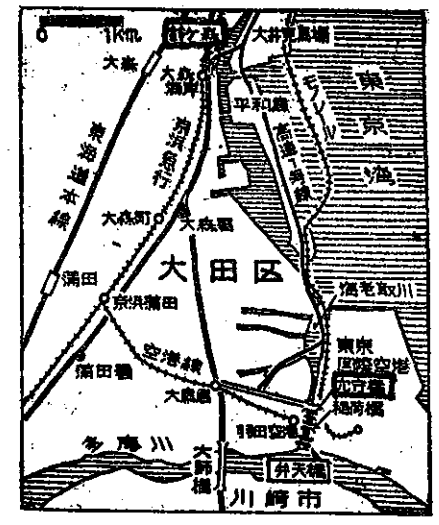
大学を出発、京浜急行大森海岸駅で下車し、一斉に京浜道路に躍り出た。この高速一号線こそ佐藤が羽田に向う道路である。羽田実力阻止はまずこの地点で追求されなければならなかった。

官憲は、首都四千の機動隊を総動員して空港付近に嚴重な弾圧体制をしいた。大森海岸駅前の高速一号線の入口（

鈴ヶ森ランプ)にも、朝六時すぎから装甲車と完全武装された機動隊二個中隊(約二百名)が配備されていた。

京浜道路に躍り出た全学連主力部隊は、ヘルメットで身を固めた行動隊を先頭に、いっせいに機動隊の壁に突入した。機動隊の指揮者がヒステリックに「警棒をぬいて応戦せよ!」と叫ぶ。たちまち高速道路入口は、学生と機動隊の激しい斗いの場と化した。

だが「何が何でも高速道路を占拠して、佐藤の訪ベトを阻止しなければ」という学生の固い決意の前には、機動隊も圧倒され、一瞬にして分断された。機動隊の半分は高速道路の中へ後退し、それを追いかちて学生が高速道路の中へ突入、羽田空港をめざしてかけ足で行進した。分断さ



れた残りの半分の機動隊がこの学生を追ってあとから走ってくる。学生に突破されて仰天した官憲は、あわてて応援部隊を

よんだ。三個中隊(三百人)のトラックでかけつけて、高速道路にかけ上り、全学連の排除にとりかかった。高速道路の上で機動隊に完全包囲されたがたちになったが、ここでも全学連は激しく、機動隊に抵抗した。

九時すぎ、ついに全学連の部隊は大井競馬場前の勝島インターチェンジから高速道路の外に排除された。だが全学連は再度隊列をたてなおし、高速一号線への再突入をめざして行進し、高速道路の下で激しい投石戦が展開された。高速道路への道は空港内から続々とかけつけた機動隊によって完全に打ちかためられた。そのため、全学連の主力部隊は、萩中公園を出発した反戦青年委員会の部隊に合流すべく、京浜急行に乗って穴守橋駅へ向った。

実に、この全学連主力部隊の高速道路占拠斗争こそ、この日の斗いの性格を決定づけたのである。高速道路一号線というまさに官憲が佐藤の訪ベトのために万全を期して確保しなければならぬ戦略的高地を一時間でも二時間でも占拠すること——これ以上に鋭く佐藤訪ベトナム反対の意志をたたきつける方法があるだろうか。全都の機動隊を総動員した「万全の警戒体制」も、こうしたベトナム侵略加担絶対反対の不退転の決意を固めた全学連の前には、もろくもくずれざるをえなかったのである。

そしてこのことをもっとも端的に表現したのは、高速道路占拠闘争によって官憲の警備体制が大混乱につきおとさ

れてしまったことである。八時に全学連が鈴ヶ森ランプに到着したとき、官憲は、穴守、弁天、稲荷の三つの橋に警備の眼目をおいて、二千四百の機動隊を配置していた。ところが全学連主力部隊の高速道路突入に仰天した官憲は、空港内の三個中隊を引きぬいて移動させただけでなく、全神を高速道路の全学連に奪われ、指揮系統が大混乱におちいったのである。

### △反戦、萩中公園を出発

午前八時、萩中公園は全国から結集した全国反戦青年委員会の労働者一千名で埋められた。東京各地区反戦、群馬、埼玉、神奈川、千葉、山形などの関東近県反戦、そして大阪、京都、静岡の仲間も前夜から上京していた。さらに、国鉄、勤労、東交は全員ナッパ服を着て、三百名に上る青年部動員で参加した。労働者は佐藤訪ベトに対する激しい怒りをみなぎらせ、「今日は闘うぞ」という固い決意で満たされていた。

また中核派、構改派の学生部隊も萩中公園に結集してきた。しかしこの時にはすでに社学同、社青同、ML派など

全学連主力部隊一千三百名は、鈴ヶ森の高速道路で機動隊の壁を突破し、徹底した斗争を展開していたのだ。八時四〇分、全国反戦の小野氏が代表者会議を召集した時、成島全学連副委員長が宣伝カーにかけ登り、このニュースを集まった労働者に伝えた。「全学連部隊はいま羽田附近の高速道路に突入し、佐藤の空港入りを阻止するために全力で闘っている。砂川を斗った全学連と反戦の斗いで、今日こそ佐藤の訪ベトを断固阻止しよう。今日の斗いなくして、英雄的ベトナム人民との連帯を口にすることはできない」と、火のように訴えた。会場は異常な緊張でつつまれ、労働者は口々に「われわれも直ちに羽田へ行こう」と叫んだ。労働者と別個の集会を開いていた中核派の学生部隊は、このニュースに驚き、あわてて集会を切り上げて会場をとり出し、弁天橋に向けてデモに入った。

「もはや集会は必要なし」「直ちに出發しろ」という激しい突き上げの中で、集会が始められた。長口舌をふるう社会党代表に、怒号とヤジが飛ぶ。吹田反戦、東北の代表が「すでに全学連が闘っている。われわれもすぐに出發しよう」と力強く訴え、一斉に拍手を浴びた。

集會が終ると同時に全員ガッチリとスクラムを組み、品川、大田地区など東京南部の労働者を先頭にデモの隊列を整えた。そしてデモ隊は、空港へ通ずる三つの橋のうちでも最も大きい穴守橋をめざし、まっしぐらに突き進んだ。まさに早朝の全学連主力部隊の革命的な高速道路占拠の闘いこそが、萩中公園に結集した全ての反戦労働者、中核派および構改派などの学生を奮い立たせた。そして、是非でも佐藤の空港入りを実力で阻止し、ベトナム侵略加担への抗議を、全日本の労働者人民を代表してたたきつけるという階級的任務を固く決意させたのである。

#### △機動隊と徹底抗戦

穴守橋 全国反戦のデモ隊は、空港への最も主要な入口である穴守橋に向け、ガッチリと隊列を組んで突き進んだ。その途中、早朝に高速道路占拠闘争を闘いぬいた全学連主力部隊が合流し、デモの先頭になった。激しい闘志にもえた全国反戦のデモ隊は、穴守橋の手前で右に折れるという社会党構改派の方針を完全に乗りこえ、全学連とともに橋の入口まで突進したのである。

割られて前線に運ばれてゆく。市街戦の武器は、学生にとって石しかない。そして穴守橋の攻撃は、圧倒的に豊富な石によって猛襲に転化した。機動隊ははるか後方から、ただ装甲車がたおされぬように、祈るのみだ。左から二番目の装甲車は、たおれない。しかししだいに左側におされ、中央に再び一メートルほどの突破口が開かれる。全学連は、ここから橋の上に突入する。喚声がかかる。機動隊は向う側から装甲車二台を真すぐ突入させる。一メートルのスキ間は再びふさがれる八台に及ぶ装甲車がここに集中され道路いっぱいにはビッシリと並べられた。放水車から強烈な水圧がデモ隊にたたきつけられた。

反戦の労働者は全学連の闘争に全面的支援を送り、スクラムを組んでいつでも前進できる態勢を整えていた。全国から結集した先進的労働者と全学連とが全ゆる弾圧に抗して一体となって闘いぬくという、六〇年一・一六羽田闘争には見られなかった事態が、初めてつくりだされたのだ。そして左はしの装甲車のタイヤが燃え上ったのである。だが十時半すぎ、ジェット機がとびたつた。

「この煙りを佐藤にみせてやれ！」と労働者が叫んでいた。

機動隊は穴守橋の最先端で装甲車四台を橋に直角に配置して防衛線をはった。橋の柱原製作所側三分の一はデモ隊到着まで一般車一台の通路として残されていたが、これも直ちに二台の装甲車でふさがれた。装甲車の前面で交戦しようとした機動隊はたちまち粉砕されて、くもの子を散らすように逃げさつた。

全学連は装甲車の中央のすき間から橋の上に突入した。中の機動隊が警棒で襲いかかる。デモ隊は激しく投石して応酬した。機動隊は防衛不可能とみるや、この中央の間けきに装甲車を突入。こうして橋の上は一寸のすき間もなく囲まれた。

だが全学連は直ちに次の攻撃に移った。正面に向かって左から二番目の装甲車をおしたおし、中央突破を敢行することである。長い丸太棒が、装甲車にぶつけられる。行動隊が一回、二回と繰り返す。装甲車が大きくゆれる。だが機動隊は、もう一台の装甲車で、倒されるのをふせいだ。機動隊が装甲車に近づくと、一斉に投石。彼らは一斉に橋の後方に逃げる。舗道の石だたみは、ちょうど安保。15夜の国会裏通り門附近のように、次々にはがされ、こまかく

る。火は次々に燃え広がり、ついに五台の装甲車が黒煙を吹き出した。

大量の石が装甲車わきに運び上げられ、機動隊の中央突破は何度も失敗する。放水車だけが入れかわりたちかわりに出てくる。

だが機動隊はなんとかしてデモ隊に襲いかかろうとした。中央の放水車がおしかえされると、投石よけと警棒に身をかためた一隊が、ついにおどり出てきた。全学連は、待ちかまえたように一斉に反撃した。投石ヨケの網が燃やされる。高々と燃え上る黒煙と放水のしぶきの中で力強い喚声が続く。

こうして約一時間、昼頃になって、デモ隊の後方に五百名の機動隊が配置された。ここでもデモ隊は隊列を整え、学生を先頭に激しくデモを開始した。そして機動隊がデモ隊を包囲するような形になった時、指揮者の「警棒をぬけ」という号令がかかった。その直後、「かかれ」の声とともに、機動隊は一斉に警棒をふりあげてデモ隊におそいかかった。前方の学生も後方の反戦の労働者も、激しく投石して勇敢に応酬した。だが機動隊の弾圧はすさまじかった。



警棒は男女の差別なく頭にふりおろされ、血まみれになった者さえも機動隊の隊列にひきずりこんで徹底した暴行を加えた。負傷者が血だらけの頭をかかえて道路にバタバタと倒れ、デモ隊は分断され、付近一带はまさに地獄絵のよくな惨状を呈した。しかも機動隊は、近所の工場や民家に逃げこむ者をも追いかけて、全ゆる暴力を奮ったのである。おびたらしい犠牲者を出しながらも、デモ隊は再び隊列を組み直し、菟中公園の総括集会に向かった。

稲荷橋 穴守橋の横の稲荷橋のたもとでは、革マル派系の学生約二百名の部隊が機動隊に対峙し、斗っていた。装甲車にロープをかけて引張ったり、装甲車の向う側の機動隊に投石したりしていた。穴守橋の装甲車から黒々と煙が上がった後しばらくして稲荷橋の二台の装甲車も燃え上った。

弁天橋 他方、弁天橋では全学連の別の部隊（中核派等六〇〇名）が斗っていた。機動隊は前面に装甲車二台をせまい橋に並行して配置し、その後方に乱闘服、鉄カブト、防石マスクと防石網と警棒を持ち、防衛線をひいていた。全学連が弁天橋に近づくとやいなや、機動隊はまず放水車

「そいかりめった打ちにする。このめった打ちされた学生の中に、山崎博昭君がいたのだ。」

学生の装甲車は、やむをえず後退し橋からひきあげた。山崎君は、この機動隊の突進、警棒の乱打の中で虐殺された。

学生の部隊は、一分間の黙禱の後、また戦列を整え、機動隊に向ってぶつかっていった。

### △佐藤 “血の出発”

この朝、佐藤首相は嚴重に警官に護衛された首相官邸を出発した。自己の政治生命の延長を日本帝國主義の野望を果すことにより確保するために、空港でははなやかな演出を準備していた。

だが十時になってもまだ現れない。そうするうち佐藤の車は一切の儀式を省略して日航機に横づけになっていることが明らかになった。なぜか？ 全学連主力部隊の高速道路一号線（鈴ヶ森付近）における占拠闘争に遭遇し、第三、第四機動隊がやっと切り開いた“血路”をすりぬけるようにして空港に到着したからであった。

から水をたたきつけてきた。学生達はこれにひるむことなく、装甲車近くにいた機動隊を押しつけ、装甲車によじ登り、装甲車を越えて進もうとした。

これに対して、機動隊は装甲車に登った学生に対し、何のみさかいてもなく放水で攻撃、学生は水圧でふきとばされ、橋下の海老取川に次々と転落した。ここに学生は機動隊の無謀な行爲に対し投石で応えた。機動隊はシリシリ後退した。

学生の反撃に装甲車の運転手はあわてふためき、装甲車を放棄して逃げだした。装甲車は学生に占拠され、バリケードは一転してバリケードを突破する道具にかわった。装甲車のスピーカーはもはや官憲の声を伝えるのではなく、「ベトナム侵略反対！」「佐藤訪ベトナム実力阻止！」の声を伝えた。

装甲車を先頭に、学生はシリシリと橋の上を前進した。装甲車の前に学生が突き進み、橋を渡りきろうとした。その時、これをみた機動隊は学生の群におそいかかった。逃げ場を失った学生が次々と川に飛びこんだ。残っている学生に向って、警棒をふりかざした機動隊が狂犬のようにお

実兄岸元首相は、かつて六〇年一月十六日全学連の実力阻止闘争によって、多摩川べりの田舎道を迂回してたどりついた。その弟佐藤は、血ぬられた高速道路の機動隊の壁の中を羽田へたどりついたのであった。

### △催涙弾で弾圧

#### 弁天橋の虐殺抗議集会

全国反戦は菟中公園に再結集した。全国反戦は正午より有楽町数寄屋橋のゼッケン行動を予定していた。だが、「弁天橋の虐殺抗議集会へ行こう」という声は全体に広がっていった。全国反戦の運営委員会はこの激しい突きあげに对应、青年部動員部隊を除いて、他は全て弁天橋に向かった。

弁天橋はデモ隊で埋めつくされた。橋から百メートルの後方まで、幅八メートルほどの道路が圧倒的なデモの波で身動きもとれない。前方で抗議集会が始まっている。全国反戦と全学連、自治会共闘のデモ隊が一分間の黙禱。そして全員座りこんだ。東京反戦の樋口君が「山崎君の死をのりこえて、大きく前進しよう。六〇年安保のとき、闘う青年労働者の力はまだ小さかった。だが今日、反戦のわれわ



これは学生諸君とともに最後まで闘いぬくだろう」と訴える。全宇連の成島副委員長は「われわれの闘いは佐藤の訪ベトに、今こそ打撃を与えている。労働者。学生の實力闘争で虐殺に抗議し、ベトナム侵略加担に烈火の怒りをたたきつけよう」と訴える。そして東京反戦の代表が「最後まで緊張して敢然と闘いぬこう」と訴え、シユプレヒコールをした。その瞬間、午後一時三〇分、バンバンという爆発音。催涙弾がデモ隊の真只中に投げこまれた。全員立ち上る。だが道路いっぱい座り込んだデモ隊は一瞬、身動きがとれない。混乱したデモ隊に、橋をわたった機動隊が警棒でメッタ打ちしながらおそいかかった。デモ隊はバググした。ところが国鉄、勤労、東交の青年部動員のデモ隊三百

名が、「いまはゼッケン行動の時ではない」として、萩中公園から弁天橋にかけつけてきた。バックするデモ隊と到着するデモ隊が交錯する。その中に機動隊が襲いかかる。民家に逃げる労働者や学生。これを乱斗靴のまま座敷のままで追いかけてくる機動隊。こうして多くの者が後方から警棒でメッタ打ちにされ、後頭部が割られた。道路が血で染る。

こうして多くの犠牲を出しつつも、デモ隊は萩中公園に再度結集し、総括集会をもって明日からの闘いを固く誓って職場学園に帰ったのである。実に朝七時から午後三時まで、十時間にわたる「市街戦」であった。

## 官憲山崎君を虐殺

山崎君は、学生の先頭に立って勇敢に戦っていた。学生が奪った装甲車を先頭にして部隊はジリジリ前進した。機動隊は後退した。学生が装甲車の前面に出て機動隊と対峙

したこのとき、突如学生の隊列に機動隊が突撃してきた。ひるんだ学生に向って狂ったように機動隊が警棒でなぐりかかった。頭や顔を割られて学生はバタバタ倒れ、ある者は川に落ちる者は失神状態となって橋上に倒れた。やむをえず学生の運転する装甲車は後退した。この警棒の乱打の中で山崎君は殺された。これが山崎君撲殺の具体的過程である。

## 山崎博昭君

(一八才)、京都大学文学部一回生、大阪市城東区茨田諸口町一四六五、大阪・大手前高校卒。佐藤内閣のベトナム侵略加担に対する闘争に参加。クラスを中心とする活動に献身的にとりくむ。このなかで砂川基地拡張反対闘争を組織し、7・9砂川基地拡張阻止現地闘争に京都府学連部隊の一員として参加。十月八日、實力阻止の決意をもって、羽田闘争に参加。機動隊の暴力によって虐殺される。京大入学後、直ちに

#### △ 遺体を闇から闇へ葬る

同志山崎君の死を知った学生は彼の遺体を求めてさがしまわり、牧田病院に収容されていることをつきとめた。山崎君を返せと学生は迫った。しかし官憲は力づくで阻止し、京浜蒲田病院へ運びさり官憲のほかはただの一人も近寄せず、事態を追及する学生に逮捕をもって脅迫した。

最初に収容された牧田病院で、院長、副院長立会いのものと遺体をみた小長井良治弁護士（評願総問）は「病院で遺体をみた限りでは車にひかれた跡はなかった。顔にけががあったが、これはなくられた傷（ぶら）と語った。さらに立会いの両医師も死因は脳内出血であると認めた。後の司法解剖の結果でも頭の挫滅を認めている。更に狹骨の骨折がある、その他無数の打傷が確認されている。

また司法解剖は札つき「慶応大医学部法医学教室」で行われた当教室は下山、官の鑑定に象徴されるように一貫して権力の走狗とみなされた。

#### △ 「死因」をデッチ上げ

果して、解剖は関係者（教室員・当局）以外に誰も立合せず、警官八〇名の厳戒体制の下に行われた。遺族が申請した医師や京大の法医学の教授の立合も拒否された。なぜか権美智子さんのときは許可したではないか。極秘裡に解剖はすめられ、普通だったら三（四）時間で済むものが、八時間もかかった。おまけにその結果の発表は、詳しいことに一切触れず、「頭部挫滅と内臓破裂」ということで、「れき死と推定される」というものであった。

また、解剖後の遺体は十一日、遺族に返されたが、内臓は依然として官憲が確保し、弁護団の引渡し要求も拒絶されている。

こうして一方的、かつ極秘裡のかつ詳しいことは発表しないといった司法解剖もまた官憲のフレーム・アップの道具にされた。

山崎君が殺された状況、頭・顔面のめった打ちからみて山崎君の致命傷は警棒による頭部打撃（ざめつ）である。

長・小長井弁護士は十日夕慶応大学内で記者会見を行ない「解剖に弁護団側の推せんする医師を立会せなかったのは一方的だ。警視庁・検察庁に抗議する」旨を発表した。さらに山崎君の父親義昭氏は警察側の「解剖所見」に対し「警察の発表は信頼できない。警察官になくられ殺されたと思う」と述べた。

われわれは官憲による山崎君の死因デッチ上げ責任転嫁それを口実とした弾圧に断固抗議する。

#### 故山崎博昭君 遺族からの手紙

前略御免下さいませ。

朝夕寒さが身にしみること頃でございます。皆様にはお元気で過ごしのこと存じます。

さてこの度の博昭の事につきまして、こんなにも力つよいお言葉いただきまして、博昭もきつと地下で喜んでい事と思えます。

あの子の死は私達にとっては、悲しい、残念の言葉につきます。でも、博和は失いましたが、多くの人々があの子

の志をついでこれからも斗って下さる事を思うと、只悲しんでだけでは申訳がないんじゃないか、私達ももっとしっかりしなければ、とこの頃そんな気持ちになれかけた様な次第です。

昨日もテレビでデモの有様を見ていて、あの中に博昭が居て斗っている様なサクカクをおこして居りました。数々の非難もございしますが、それをのりこえて、がんばってゆきたいと思つて居ります。

御礼が後になりました大へん失礼致しました。同封のお金たしかに受け取りました。皆様の御厚志厚く御礼申し上げます。早速霊前に供えさせていただきます。

何かと大へんだろうと思えますが、どうかがんばって下さい。寒さに向います。御身体御大切に。

十一月十三日

大阪赤城東区茨田諸口町一四六五―一二二 山崎春子・義昭  
共産主義者同盟様

# 佐藤の国際的権威失墜

## ベトナム解放戦線が<sup>10・8</sup>支持表明

一名の死者とおびただしい負傷者を出して斗いとられた10・8佐藤訪ベト阻止羽田斗争は、全世界に巨大な衝撃を与えた。佐藤内閣の国際的権威は一気に失墜した。他方、10・8羽田実力阻止斗争は、米帝の反革命侵略介入に對決して斗っているベトナム人民および、全世界プロレタリアート人民との固い連帯のきずなをつくりだした。

アメリカでは、八日朝のテレビジョンのトップニュースに「佐藤首相の南ベトナム訪問反対で死者まで出す大デモ」として報道され、くり返してとり上げられた（九日毎日、朝日）。佐藤の訪ベトを米國のアジア。極東政策への強力な支えと受けとり、南ベトナム援助に佐藤が本格的に踏切ること

を期待し、それゆえに今回の訪ベトを「歓迎」していた米政府に大きな衝撃を与えた（九日朝日、毎日）。さらに日本の国内政治情勢を安定したものと

している写真を一面に大きく掲げ、次のように報道している（九日、朝日）。「一九六〇年の安保騒動以来、最悪の暴動」「この暴動は、佐藤首相の外遊の全目的をゆきさぶる結果になった、今回の外遊のヤマはサイゴンである」「佐藤氏は帰国の際、サイゴン訪問の理由について詳細な申開きを問われることになる」

取り上げた。「抗米愛國闘争」「親米売國の首相」というような位置づけに問題があることはいうまでもないが、次のように述べて反戦、全学連の実力阻止闘争を高く評価している（九日、毎日夕刊）

「勇敢な日本の学生は八日、東京の羽田飛行場で数年来なかつた激烈な抗米愛國闘争を繰広げ、日本の親米売國の首相、佐藤栄作の南ベトナム訪問に断固として反対した。二百人あまりの学生が負傷し、山崎博昭という名前の青年学生は壮烈な死をとげた。学生たちは残酷な弾圧の前に少しも恐れず、断固として反撃し、多くの警官を負傷させた。かれらはまた警官の手中から装甲車を奪い、焼いた。」

ある南ベトナム軍事からい政権にとつては今次の闘争は重大な衝撃であった。南ベトナム国内では、先の大統領選の結果にみられたように、米軍政に民政移行という茶番劇で合法的カモフラージュを与えようとしたチュイー・キ組に對し三分の一度の得票しかえられず、和平候補に票が投ぜられた。さらにこの選挙の不正を追及する学生、仏教徒のデモがデモ禁止令のもとで、ほぼ二年ぶりに高まりつつある。

争への連帯を表明している（十一日、朝日）。「サイゴン大学学生連盟はベトナムの独立と平和のために、佐藤首相の南ベトナム訪問に反対して戦っている日本の学生に對し、心から賛同の意を表する」。南ベトナム解放民族戦線は九日カイロで10・8闘争支持の声明を出した。「佐藤首相が日本国民の反対を無視してサイゴンにやってくるという事実こそ、佐藤首相がジョンソン政府の政策に追隨していることの明白な証拠である。われわれは佐藤訪問に反対する日本国民の英雄的行為をたたえ、かつこれに感謝する。デモのさい死亡した学生の家族には心からおくやみをいいたい」

# 全国反戦、全学連

10・8から11・12へ  
10・13

## 八千名起つ

十月十三日、全国反戦青年委員会主催の「ベトナム侵略戦争反対、佐藤訪米阻止、21国際統一行動」をかちとる中央決起集会」は夜六時より日比谷野音でひらかれた。

に斗いぬいた反戦青年委員会と全学連は、それ以後の権力の徹底した弾圧とマスコミの統制された反動的宣伝にめぐみ「山崎君虐殺抗議」の横断幕等をかかげ、統一集会としてかちとったのである。

デモは東京八重洲口まで行われたが機動隊は、学生と地区反戦の隊列に、はじめから問答無用の暴力の限りを尽した。しかし、デモ隊は終始ジグザグデモを展開し応戦した。

この日全電通指導部は破廉恥にも「山崎君虐殺抗議」を集会に掲げていることに反対し、全電通青年労働者を野音の外に待機させた。しかし、下部労働者のつきあいで結局他の青年労働者との集会に合流せざるを得なかった。

## 八千名の山崎君追悼中央葬

十七日、日比谷野音で開かる

集会には、国労、電通、全通等の青年部が組織動員し、東京、神奈川、千葉等の地区反戦をあわせ八千名の青年労働者と二千名の全学連学生が結集した。

10・8斗争において、総評、社会党共産党がサボタージュする中で、とも

「虐殺抗議山崎博昭君追悼中央葬」は、一七日夜六時、小雨のふる日比谷

野外音楽堂で力強く勝ちとられた。

この日日比谷公園は戒厳令下を思わせる警備体制がしかれた。全学連秋山委員長、成島副委員長に逮捕状を出した警視庁は、公園の全ての入口に機動隊と私服の検問体制をとり、三名一組の機動隊員が公園をとこらせまじと巡回するといふものもしさだつた。それでも不安な警視庁は、野音の入口を

遺族の紹介が行なわれた。続いて10・8羽田闘争弁護団長小長井氏が、熱烈な報告を行った。

「山崎君は機動隊に撲殺されました。これについて警視庁の見解と私の見解は根本的に対立しています。警視庁以外で立ちあつたのは私が最初でした。その意味でも私は責任をもって全ての真実を明らかにしたい……」

局長（「お前らは何をしているのだ」という強烈なヤジが高まる）全国反戦京大教授井上清氏、日中友好協会正統本部など日中関係五団体を代表して坂本徳松氏、三里塚反対同盟、砂川反対同盟等から次々とよせられる。全世界からの激電もよせられた。

一カ所にし機動隊によってトンネルを作りライトを照らして集会参加者を一人一人首実験にかけ、荷物を調べる等の不当な捜査をした。

だが会場は四時ごろからまず全学連各大学の部隊が集集し始め、六時ごろには、反戦青年委の労働者や一般の人達も加わり完全に埋めつくされた。

鶴見俊輔氏の開会のあいさつと一分間の黙悼、各団体代表の献花に続いて

羽君、東京地区反戦代表樋口氏のあいさつ、樺光子さんのあいさつと樺俊雄氏の詩の朗読、京大・高校時代の友人の追悼のことが続いた。

各界の弔辞は、社会党井岡国民運動デモに移った。



この日警視庁は、警視庁前コースを許可しなかった。首相官邸から東京駅

八重洲中央口までのデモに機動隊は完全サンドイッチ規制で弾圧のかぎりを

ついで、山崎君中央葬の盛り上りをおさえようとした。

だが、「学生が学生を殺した」という恐るべきフレイムアップも、けつして成り立つものではないことをこの日の中央葬は内外に明らかにしたのである。

また、10・8羽田闘争が、11・12訪米阻止闘争の爆発へとひきつがれる基礎を築いた。

### 解説

「山崎君追悼中央葬」は社共以外の全ての潮流を結束し、統一した中央葬として成功のうちに終った。だがこの「中央葬」を準備する過程は、実は今日の革命的左翼内

部の右翼路線と闘争し粉砕する過程でもあった。

即ち、革共同中核派は、この葬儀を国民的同情のもとに行おうとして、われわれの会談申し入れにもかかわらずこれを拒否し「一四日に国民葬」を決定、学連書記局にも提起することなく

大衆宣伝を開始し、社会党にゲタをあずける工作に走った。だが社会党がこれを拒否、しかも権力の一大フレイムアップが明らかになるや単独集会の自信をなくし、一四日を延期し、同時に

一四日のわれわれの弁天橋の献花追悼方針に同意した。しかし統一葬儀の準備についてはもう一つの条件が生れる

まで具体化することはできなかった。もう一つの条件とは、日中友好協会正統本部の呼びかけである。彼らが全学連と東京地区反戦に「人民葬舉行」の

申し入れをし、これに全ての潮流が応えることによってようやく葬儀準備委員会が開かれたのである。

この準備会は中央葬成功の基本的原動力になったものであり高く評価されねばならない。それは特に人民葬の日

標を、第一に山崎君の追悼、第二に佐藤への抗議、第三に10・21から11・12への新たな闘いへの決意を固めることを全体で確認したことである。このことによって、統一中央葬の圧倒的成功が保障されたのである。だがこの準備

会は、開会冒頭から激しい論争の場となった。即ち、名称を「人民葬」とするか「国民葬」とするか、また主催団

体を全学連・東京地区反戦を中心にするか、文化人若干名にするかである。これは羽田闘争の総括と今後の闘争方針にかかわる対立として、最後まで

続けられた。革共同中核派と構改諸派

は、10・8闘争の意義を評価できず、

「学生が殺したのではない」という弁

解と、国民的同情に期待するという驚

くべき小市民主義を露呈した。われわ

れは、羽田闘争の打撃力こそ、日本帝

国主義の国際的権威を大きく失墜させ

「アジアの大國」という佐藤政府の国

民結集政策をマヒさせたこと、だから

こそ官憲の一大フレイムアップという

空前のまきかえしが行われているので

あり、この厳しい情勢の中でいたすら

に小市民的同情に期待することほど危険

険なことではないとして、全学連 地区

反戦を主体とする「人民葬」を主張し、

構改諸派と戒共同中核派を除く全ての

潮流の支持を得て集会の成功に全力を

つくした。

10・8闘争前後から今日に至る革

同中核派のセクト的路線はこの中央葬

の中にも最大限持ちこまれたが、これ

は彼らの法大闘争の破綻につづく内部

危機の卒直な現われであり、革命的左

翼の絶対にとってはならない小市民主

義的動搖の自己暴露以外の何ものでも

ない。

## 10・21 全国で二十万起つ

### 国際反戦統一行動の中核担う

十月二二日、国際反戦統一行動に呼

応して全国で二十万の労働者学生が決

起し、東京の明治公園では総評、中立

労連などの主催する「沖繩・小笠原の

即時全面返還、アメリカのベトナム侵

略反対、佐藤内閣の戦争協力抗議、エ

ンタープライズ寄港阻止、10・21統一

行動中央集会」が、昼・谷にわたって

開かれた。

まず昼は、午後二時から教組、自治

労、電通などを初め約三万名が集まっ

た。

また夜は、国労五千を中心として、

全金、鉄鋼などの民間単産三万人が結

集した。さらに反戦青年委員会は、五

百名の青年労働者の結集をもって加わ

った。集会後、デモに入ったが、新宿

コースの反戦青年委のデモ隊は、伊勢

丹前の十字路で戦闘的シグザグデモを展開した。ここで官憲は、一人の労働者を不当逮捕した。これに対し反戦の労働者は全員路上に坐りこみ、不当弾圧に抗議した。

### 全学連、五千決起

10・21 国際ベトナム反戦統一行動に全学連は五千名が明治公園に結集し、戦闘的デモを展開した。

21 斗争の結集は、中大一千名、明治五百、立正三百、法政三百、国大二百等を中心として、圧倒的社学同の組織力によって保証された。10・8以降の国家権力・マスコミの全学連に対する集中砲火、羽田斗争を闘った部隊と全学生を分断しようとした策動に対し、大胆卒直に11・12の意義

の圧倒的物量のために新宿から早大文校内へ向かわざるをえなかった。

しかし、早大一文内総括集会において全ての学生は、11・12 訪米阻止斗争においては、絶対に10・8を上回る実力斗争をもって勝利することを固く意志統一して解散した。

なおこの日、全学連の戦闘的力を怖れた民青は、労働者の本隊が結集した明治公園から逃亡し、芝公園で二千名の集会を開いてお茶をにごした。

### 日共、集会を破壊

11・9 沖繩返還中央集会

十一月九日六時から、日比谷野音で沖繩三団体主催の「沖繩・小笠原即時無条件全面返還。サンフランシスコ条約第三条撤廃要求中央集会」が開催さ

れようとした。

ところが、日共がセクト的にも会場内の全学連学生一、〇〇〇名の排除を要求した。社会党は全学連排除に反対し、対立が続いた。そのため八時頃になってもまだ開会できず、会場内の全

学連や労組からは日共の妨害を非難す

る怒りの声がうずまいた。八時半、沖

縄復帰協の喜屋武会長が決議文を朗読

しただけで集会を打切った。日共だけ

が会場に残ってセクト集会を開いた。

全学連は首相官邸に向い、十一名が不

当逮捕された。

この11・9 集会の流会は「トロツキ

スト攻撃」というセクト利益がいまや

大衆闘争の利益に敵対するにいたった

ことを全大衆の眼前で暴露した。

## 米騒動 実力行動 社共のりこえ70年への道きり開く

# 労学一万

# 10・8を上まわる徹底抗戦

## 11・12羽田闘争

11、12 佐藤訪米阻止羽田闘争は、10、8 闘争を上まわる労働者・学生一万名の結果のもとに、文字通りの徹底抗戦の意志をもつて闘いぬかれた。全学連四千名の部隊を中心に、断乎とした実力闘争が展開され、機動隊の阻止線を二度にわたつて突破し、七〇年安保闘争への展望を力強く切開いたのであつた

### △決起集会(大)・統一宿泊(大場)を実現

官憲の事前弾圧を粉砕

11、12 佐藤訪米阻止闘争の戦端は、前日十一日夕刻にすでにはじまっていた。政府は不当にも十二日の秋中公園を結集地としたデモを不許可にした。さらに大学当局を使って大学を封鎖させ、集会を阻止しようとした。これによって官憲は、十一日段階でまず結集を阻止し、学生がこれを取り越えて結集した場合は機動隊を大学内に投入することさらにデモが行なわれた場合は徹底的に弾圧することを意図していたのである。何としても羽田現地斗争の実現を阻止しようとしたのである。佐藤訪米の意図を端的に示すこの大弾圧体制をはねのけ、徹底的な抗議の実力斗争を展開すること、これこそが全学連に問われた課題であつた。こ

うして佐藤訪米阻止闘争の第一の段階は、十一日の社会学同決起集会、全学連総決起集会を実現し、かちとることにかかつていた。

十一日四時半、中大当局の不当な「退去命令」に抗し、会場を設営した中大昼自治会を先頭に中大講堂にはつきつぎと社会学同部隊が到着した。五時半には千五百名をこえる。学生が社会学同決起集会に参加し、全学連総決起集会を保証し、成功させる体制が築かれたのである。

九時前、早大に一旦結集した社会学同解放派が到着し集会に加わつた。ついで参加をためらっていた中核派も、統一集会の呼びかけのもとに、法大から四百名余の部隊をもつて加わり、全学連総決起集会に移つた。

集会は全学連成島副委員長の発言で始まり、まずインタビューを斉唱し、全学連中執から次々と斗争への決意を述べた。

成島君は12斗争は「統一集会、統一宿泊、統一斗争によってこそ完遂される」と強調した。全学連部隊はこの発言のもとに固く意志統一を行なつた。おわりに東京反戦の樋口氏が連帯のあいさつを述べ、満場の拍手をうけた。

だが、中核派指導部は、中核派下部の熱望をおさえつけ、集会の最初からインター斉唱にも加わらせず、拍手も制止するという驚くべき態度に出た。中核派幹部は「北小路に発言させる」という口実で、10・8以後動揺する中核派下部を思い込もうとしたのである。

社会学同は中核派幹部を説得する一方、弾圧介入の機会を狙っている官憲を顧慮し、直ちに全体が東大教養学部に向うことを提起した。なぜなら統一行動に敵対する中核派幹部を除いても、統一宿泊を実現することは、弾圧をはねのけて闘う大前提だったのである。

十時四十分、中核派を除く全部隊は東大駒場に移動を開始し、到着と共に泊りこみ体制に入った。

おりから行なわれていた駒場祭の実行委員会(統社同・フロント系)と直ちに交渉をもち、次の四点が確認された、①国家権力の介入を断固として阻止する②駒場祭を成功さ

せる③机、いす等を元の場所に復元する。④復元後すみやかに駒場を出発する。

これに対し大河内総長を先頭に大学当局は二時、四時の二回にわたり退去命令を出した。全学連は機動隊の乱入に備えて、第一本館を砦とし、防衛体制を断固として築いた。これによって、中、明、法、早の四大学を制圧し、事前弾圧を行なおうとした官憲の意図は粉碎された。のみならず官憲は近くの首相私邸(世田谷区代沢)にあわてて千名の機動隊を配置せざるを得なくなり、結果として駒場への機動隊導入を不可能なものとしたのである。

中大に残り、弧立したためらっていた中核派は北小路の、「法政に分裂宿泊せよ」という提案にもかかわらず、統一斗争をめざす下部のつきあげにおされて、午前一時ごろようやく駒場にやってきた。だが九〇〇番教室に入ったまま、官憲に対する防衛体制には全く参加しなかつた。

翌十二日早朝小雨の降る中を、全学連は部隊別に集会をもち、デモで隊伍を整え正門前に結集した。これに対し事態に驚愕した民青は、正門附近にたむろして、口々に「暴力学生帰れ」などと叫んだ。だが訪米阻止には一言もふれ

えず、国家権力の弾圧に身を屈し道を開くものの醜い姿をさらけだした。

十時を過ぎるころ、前日の宿泊体制には遅れたため参加しえなかった、一部の都下および近隣の部隊も続々と到着し、正門前集會に参加した。すべての参加者は官憲の不当な弾圧に対する防備に身を固め、正門前はたちまち三千名近いヘルメット部隊で埋めつくされた。中核派は統一集會統一宿泊につき従いひきつけられながらも内部的に統一できず、東大構内で自派だけの分裂集會を開いた。

十二時二〇分、集會を完了し、団結を固めた全学連は、遂に中核派を置いて、羽田に向って出発した。

#### △催涙弾、警棒に屈せず阻止線を突破

この日、官憲は実に七千人の警官隊、装甲車などの車輛四三〇台、海上には巡視艇二二隻を動員し、空前の大弾圧体制をもつてのぞんでいた。10・8斗争で全学連が突破した高速道路鈴ヶ森ランプはすでに機動隊・装甲車によって嚴重に固められていた。阻止線は10・8斗争の主戦場となつた空港隊の三つの橋(穴守・稲荷・弁天橋)からさらに

二時十五分を過ぎるころ、全学連は再び産業道路へ前進しはじめた。機動隊が再び突撃してくる。催涙弾が絶え間なく発射され、数十発に達する。だがデモ隊はひるまない。行動隊を先頭に次第に機動隊を圧倒しはじめた。機動隊指揮官が狂気のように叫んでいる。ついにデモ隊は阻止線を突破、機動隊は雪崩れるように後退する。催涙弾が機動隊に投げ返される。大型タテも役に立たない。学生達は機動隊の棍棒をはねかえし、戦士体制のまま機動隊を押しまくる。機動隊の最高の弾圧体制最新兵器と最大動員による弾圧体制を突破したのだ。大鳥居駅から産業道路附近一帯は立ちこめる催涙ガスと双方の投石、喚声につつまれる。機動隊に頭をわられた学生が後方に送られてくる。先頭と後方を分断しようと産業道路の装甲車のかげからとび出してきた機動隊がまたたくまに追いつらされる。

だが次第に機動隊が増強され、大鳥居駅―産業道路を大きく包み込む形で包囲の動きを示しはじめた。同時に分断を狙って日の出通りに平行した裏路に機動隊が投入される。頭上にはヘリコプターが巡回し、無電で直接機動隊を誘導しはじめた。産業道路はしばし一進一退の対峙状態が続け

外側の産業道路にしかれた。「空港には一步も近づかせない」という体制である。そのためにデモ自体は暴力で粉砕し催涙弾・警棒で弾圧する万全の体制でまぢかまえていた。しかしこのような不当な弾圧も訪米阻止の決意にもえる全学連をひるませることはできなかった。ヘルメットなどの防衛装備に身を固めた三千余の杜学同、社青、同解放派等の全学連は今や、一路空港めざしてデモ行進に移った。

二時、早くもデモ隊は大鳥居駅を左にみて産業道路に達した。

ここで官憲は羽田へ向う道を数台の装甲車で完全にふさぎ右手の萩中公園方面には三千の機動隊を配置した。全学連はまず右手の機動隊の妨害に備えるため隊列を右向きに整えようとした。この時、機動隊が等身大のジュラルミン製のタテを先頭に喚声をあげてデモ隊に突っ込んできた。警棒が最初から乱打される。不意をつかれたデモ隊は産業道路からゆっくりと後退し、日の出通りの出口をかためた。

二時七分催涙弾が投げられた。催涙ガスがたちこめる。だが官憲の思惑に反してデモ隊は少しもひるまず催涙弾を投げ返し、隊列をととのえて反撃の体制に入る。

られていた。

二時五〇分、機動隊の動きに対応して、デモ隊は伸びきつた隊列を整えはじめた。この時機動隊が新手を投入して大弾圧に出た。デモ隊は防衛体制を維持しつつ、ゆっくりと後退する。日の出通りの後方部隊附近でも迂回した機動隊がデモ隊に襲いかかった。警棒がめちゃくちゃに乱打されほとんど無数の学生が負傷し、逃げ遅れた学生が無差別逮捕される。どこもかしこも機動隊の狂気の弾圧と徹底抵抗する学生との衝突がくりひろげられた。この中で最大の負傷者と逮捕者が出た。さらに私服刑事と機動隊は催涙ガスに逃げまどう市民の列に突入する。

市民は口々に「警察は暴力団と同じだ」「こういう事態はすべて佐藤の訪米に責任があるのだ」と叫んだ。機動隊の暴行を糾弾する市民に対し、機動隊は二度・三度とこすき私服は「検査だ」と脅かす。

この時、駒場を遅れて出発した中核派の部隊が国電蒲田駅からようやく到着し、隊列につく。しかし機動隊に弾圧されてすぐに後退し京浜蒲田方向へ退却しはじめた。主力部隊は三時すぎ京浜蒲田駅に後退直ちに隊列を点検した。



すぐ駅前で再度空港へ行進するため決起集会が開かれた。多くの学生はすでに傷つき目は催涙弾でやられていた。しかし全学連はここでひるむことなく、再度の抗議斗争を決意した。

#### △再度結集し、訪米阻止闘いぬく

空前の大弾圧体制―無差別逮捕、催涙弾、警棒の乱打―これらは少しも全学連をひるませなかったのだ。再度の結集、斗争こそ佐藤訪米阻止への全学連の決意を示すものであった。

大鳥居附近に達するや三度目の闘いが始まった。機動隊はタテを先頭に突撃してくる。全学連は機動隊の新兵器、ジュラルミン製の盾に向って太い五メートル近くの丸太棒を先頭に突撃した。空港への抗議の執念は、機動隊を後方へふぎとばした。学生が三たび産業道路に姿をあらわした。こうして全学連は佐藤が訪米に出発する最後の瞬間に至るまで闘いぬいたのである。

再び戒厳体制が崩された。戦斗的隊列におされて、機動隊は随所で後退する。機動隊の一部は、市民の列をかきわ

け細い露路に逃げこむ。逃げ足は市民より早かった。この醜態に見ていた市民もおどろき、失笑にかわった。この間一進一退のまま萩中公園、羽田空港線を含む周辺一帯へと闘いの場が広がった。引きつづき催涙弾が発射され、ついに七七発に達した。

萩中公園附近では、学生の一隊が、公園内に停車していた「護送車」を発見し、不当検査され手錠をかけられていた四名の学生を解放した。あわてた官憲は直ちに非常線をはって、再検査に奔走した。このように官憲の一方的な不当弾圧をはねのけて闘う革命的状況が随所で展開されたのである。

この頃からあたりは夕闇につつまれた。三度目の空港へのデモは佐藤の羽田出発への怒りをこめた果敢な闘いとして最後の最後まで展開された。学生は多くの負傷者をおかしながら京浜蒲田駅へ向ったのである。

駅前では全学連の総括集会がもたれた。集会では第一に「全学連が「七〇年安保強化への道」佐藤訪米実力阻止」のスローガンを掲げ徹底的に闘いぬいたこと。さらに官憲の事前介入を許さず統一斗争を10・8をはるかに上廻る規

模で実現したこと。これによって、佐藤訪米の目的とされた沖繩返還問題は七〇年安保体制強化の策動であり、アメリカの国際的革新革命体制への加担行為以外のなにものでもないことが全社会的に暴露された―という政治的意義が確認された。第二にこの反動的意図を陰べいし、デモに圧殺しようとした官憲の大弾圧体制を再三にわたって突き破り、政府国家権力に巨大な打撃と衝撃を与えたことが確認されインターナショナルを斉唱した。

### 三千、羽田現地実力闘争へ

#### 抑え込む指導部激しい突上げ

反戦青年委員会に結集する全国青年労働者の佐藤訪米阻止斗争は、官憲の露骨な弾圧と全国反戦指導部のさいげんのない動搖をのりこえて前進し、10・8を上まわる三千名の羽田現地斗争参加をかちとった。

#### △全国反戦の斗争方針

まず、十一月七日の全国反戦運営委員会は、11・12佐藤訪米阻止闘争について次の二段階の闘争方針を決定した。

①十二時半から日比谷野外音楽堂にて、全国反戦主催の決起集会を開き、一時に出発、東京駅八重洲口国労会館までデモをする。

②その後直ちに羽田現地闘争に向う。羽田現地闘争は全国反戦関東ブロックが主催し、全国反戦が集会とデモの最高責任を負う。三時萩中公園にて集会、直ちに10・8コース(萩中公園→穴守橋)のデモに移る。

この決定は、11・12斗争を都内の集会とデモだけに限定して「現地斗争はやらない」という社会党を全学連山崎書記局長、尼ヶ崎反戦代表さらに東京地区。反戦連絡会議が徹底的に突上げることによってかちとられたものである。

現地斗争一本にしぼられていないという限界があるにせよ、現地斗争回避という社会党。総評の全体的動向の中で、ともかく現地集会と佐藤出発時に向けてのデモを全国反戦全体の方針としてかちとったことは、10・8斗争と反戦に結集する青年労働者の斗争の前進が生みだした巨大な成果であった。

## △官憲の露骨な弾圧

ところが官憲は、こうした反戦の斗いの前進に対して露骨な弾圧をもって臨んできた。まず警視庁は全国反戦が屈出した秋中公園の集会および秋中公園↓穴守橋のデモコースを不許可にした。与えられた「許可」コースは、羽田空港から四キロもはなれた六郷橋から出発し、産業道路の八百メートル手前で解散する、という屈辱的なものであった。

佐藤訪米の前日十一日朝から首都は異常な緊張につつまれた。

首相官邸に「訪米抗議」に向った全国反戦等のデモ隊を機動隊二百人が襲って弾圧したのである。社会文化会館（社会党本部）を出発した全国反戦および東京反戦常任、動労国労。電通の青年部組合員、構改派学生等の二百人のデモ（歩道を歩いていた全くの「平和的」デモ）を襲って全国反戦の小野事務局長等三人を検挙し、デモ参加者全員をなぐるける、つきとばすの大弾圧を加え、日比谷野音までなぐりかえしたのである。

さらに前夜。有楽町教寄屋橋公園で、東京各地区反戦連

絡会議の労働者五十名が「佐藤訪米阻止！すべての青年労働者は反戦とともに明日行動に起とう！」と力強くマイクとピラで訴えた。この時由井さんの焼身自殺が電光石火で伝えられた。「明日はやるぞ」という緊張感がこみあげてくる。

## △地区反戦中心に五千の大結集

### 日比谷野音

十二日、日比谷野音には、十一時頃からはやくも反戦の労働者が数人あるいは数十人づつグループをつくりつつ結集してきた。新しく生れた茨城県反戦の七〇名も一団となつて入ってくる。十二時過ぎには野音の全部の席が埋めつくされた。全体で五千。その主力は東京各地区および関東近県反戦の千五百と大阪、尼ヶ崎、京都、静岡、茨城、宮城、福島等を含む地区反戦動員である。

さらに国労。動労の四百を中心とする総評の単産別青年部動員の部隊が第二のグループを形成する。第三には、ベトナム反戦学生共斗会議（構改系）等の学生や東大ベトナム反戦会議等のさまざまな反戦組織である。

とくに東京各地区反戦には百名のヘルメット部隊が組織された。社青同は白ヘルメット、共産主義者同盟は黄色のヘルメット。革共同の諸君も「ヘルメットはかぶってこなかった。俺達も日和りはしない」といっている。反戦の結集は質的にも量的にも10・8斗争をはるかに上まわっていたのである。

十二時半、野音の集会（「ベトナム侵略反対、佐藤訪米抗議全国統一行動中央総決却集会」）が始まった。社会党伊藤青少年局長のあいさつが野次の中で終わったあと、同じく社会党井岡国民運動本部長があいさつする。「社会党は何をしている！」「日和るな！」の野次がとぶ。「10・8羽田斗争のとき私が出した社会党声明に対してさまざまな非難があったが、私はあの声明はまちがっていないと思っ  
ています」という発言に苦笑と「ガンバレ」の声。最後に「私はいまから佐藤首相の訪米反対のため羽田に行きます」と発言すると、「反対ではなく阻止だ！」「ヘルメットをかぶっていけ！」の声とともにようやく拍手がおこる。こうした言葉のはしはしにも「今から羽田へ行くのだ」という決意と、羽田現地斗争をサボっている総評社会党既成指

導部への不満と「今日はやるぞ」という決意がみなぎっている。

集会は大会宣言朗読で簡単に終り、直ちに新橋駅に向けてデモ（当初の八重洲口デモは、「できるだけはやく羽田現地に行く」ために変更された。）

日比谷野音から新橋駅までほとんどかけ足のデモで走りぬけた。新橋駅からは斗争お第二段階―羽田現地斗争がいよいよはじまる。日比谷に結集した五千の大半、三千名が羽田現地斗争に参加した。

## △羽田現地斗争へ

品川駅で京浜急行線にのりかえて「六郷土手」駅に向かった。途中、羽田へ通ずる高速道路一号线の上に機動隊のトラックがぎっしり並び、警戒体制をとっているのが電車の窓からみえる。

乗りかえのため蒲田駅につくとすでに羽田空港線は全学連の斗いによって、ストップされていることが報道され、いやがうえにも緊張感が高まる。

「六郷土手」で下車。大田区民広場（六郷ゴルフ場）に

三千名が結集。一〇・八斗争時に比較して部隊は倍加する結集力をみせた。行動隊を編成し、全員録の腕章をつけて、直ちに行動に移る。ヘルメットの行動隊で前列を固めた二つのてい団をつくってデモに出發した。

六郷橋を出發した反戦デモ隊は、なかばかけ足行進でひたすら空港をめざして多摩川沿いのコースを進んだ。

最初の試練は大師橋手前八百メートルの地点であった。「許可」コースどおり左折するのか、それとも、「不許可」コースを大師橋にむけて前進するのか。前方には警官が十人位しか警戒していない。だが、前進は、この日の官憲の阻止線である産業道路まで行くことを意味した。

全国反戦指導部は、いったんは「左折し許可コース」の方針を出す。東京反戦の指導者が社会党の宣伝カーからこの方針を發表するや、激しい突上げでかき消される。四時一〇分がせまってくる。デモ隊の後方では「何故立ち止っているのか」という激しい突上げ。ついに第二梯団が先頭におどり出る。中核派の幹部がこれをおさえようとすが吹きとばされた。「産業道路に前進しよう」。ついに決断隊列は前進した。再び必死のかけ足。部隊は大師橋の二十

いっばいに隊列を配置して機動隊と対峙するかたちになった。異常な緊迫感がデモ隊をつつむ。周辺の歩道上に満ちあふれた群集も固ずるのんで成行きを見守っている。

#### △動揺する指導部に激しい突上げ

全国反戦は「直ちにウターンして土手で解散集会」の方針を出した。「あと五分で、機動隊の実力行使だ。これ以外の方針なら、各県反戦を後から解散させるぞ」と喝した。だがウターンなどは機動隊を面前にしてシッポをまいて逃げるようなものだ。デモ隊の前列や大阪反戦から激しい野次と突上げがくりかえされる。「何のためにここまで走ってきたのだ！」等々。全国反戦指導部も発言の中断を余儀なくされる。こうして三〇分余にわたって全国反戦の動揺がつづく。

デモ隊の後方では何が行われているのか全くわからず「前へ進もう！」の声がくりかえされる。

こうした中で、全学連の市街戦が一段落したのをまっぴり社会党と機動隊との間でボス交が成った。「萩中公園横で流れ解散」というものである。だがデモ隊には何も発表

米手前とまった。前方に五〇名程の学生が機動隊にとりかこまれている。「何をしているんだ」「学生を見殺しにするな！」「先頭の行動隊からも激しい突きあげ。そしてこのとき大鳥居付近では全学連の第三回目の進撃によってさまじい市街戦が戦われている最中であり、産業道路には機動隊の部隊が大量に配置されていた。前進して産業道路を行進するか、それとも引返すか――。

全国反戦はまたもや「闘争回避」の方針――「ここで総括集会をやるう」――を提案。とたんに「ナンセンス！」「前進しろ！」「全学連がいま闘っている。われわれも行くう！」の声がデモ隊から猛然と発せられる。もう四時一〇分だ。長いじれったいような動揺。そしてようやく再度決断が下る。反戦部隊はスクラムを固くして産業道路におどり出る。これにたいして機動隊がジュラルミンを並べて阻止体制をくむ。反戦デモ隊は機動隊の五米近くまで接近する。最前列が座りこみを始めると同時に第二てい団が右側にまわりこむ。さらに構改革系学生部隊が左側にまわりこむ。その左側に大阪を始めとする反戦の全国動員部隊がまわりこんだ。こうして反戦の部隊三千は産業道路の道幅

されない。いきなり立上って前進を開始する。このとき私服がデモの先頭にいた三名の仲間を逮捕した。

デモ隊は機動隊のサンドイッチ規制をうけたまま萩中公園よこへ、そしてさらに千メートルも運ばれ、ここでもただけの総括集会をして解散した。

だがそのあとの各地区反戦の総括集会においては全国反戦指導部に対する徹底的批判と熱のこもった決意が語られた。全学連は未だ斗っているのだろうか、という押えがたい気持を胸に秘めて流れ解散したのである。

#### 滑走路に乱入 日中友好協会(正統派)

空港国際線ロビーの国際線ゲートには、社会党、共産党等、訪米「抗議」に動員された約千名がいた。その上にはその倍位の日の丸を手にした自民党動員の「歓送団」が声をはり上げている。

二時すぎ、ロビーのテレビが大鳥居駅の斗いの速報を流した。日中友好協会正統本部の二団約二百名が、この全学連の斗争を支持する集会をロビーで始めた。黒田寿男会長のあいさつのあとこのグループは滑走路入口に向けてデモ

を開始した。そして十数人が滑走路に乱入した。  
警察は人数にものをいわせてこのデモを包囲し、検挙した。

#### 不当検挙の内わけ

△公務執行妨害一二四△公務執行妨害と凶器準備集合罪  
八七△凶器準備集合罪七一△航空法違反一二△都公安条例  
違反一一△道交法違反一一△軽犯罪法違反九△住居侵入二  
△公務執行妨害と住居侵入一△暴行一△傷害一△銃砲刀剣  
等取締法違反一△未調査二。

△全学連二七八△革マル派一四△反戦三△日中関係三八。

(九十ページから)  
て切りはなす陰謀をつよめたことは文字通り10・8闘争を  
きわだたせ、戦闘的労働者学生はこの闘いへの集中的攻撃  
を必然化した。そして社会党、とくに日共の救いがたい日  
和見主義につけこんで、権力は10・8闘争の孤立化に全力  
を集中した。

しかし、全世界各国でみられた実力闘争と、これを生み  
だしたダイナミックスは、明らかに日本においても共通の  
ものである。日本帝国主義の死活をかけた攻撃的合理化、  
賃金抑制、そして大規模な財政収奪に対する闘い、そして  
闘うことの要求の増大、これにたちふさがることは社・共  
といえども不可能である。この事実が10・8で全国反戦の  
労働者と全学連学生の間で集中的に示されている。しか  
もこうした闘いの力学は、ベトナム労働者・人民の闘いと  
の連帯によって日本の労働者・人民をますます深くとらえ  
ずにはおかない。われわれの闘いは明らかに全世界的な労  
働者・人民の闘いの高揚の一環としてある。そしてこの高  
揚は、全世界的な規模での帝国主義支配の一掃、またその  
突破口としての日本帝国主義権力打倒へと永続的に発展せ  
ざるをえないであろう。

(戦旗十一月五日号)

## 共産主義者同盟の方針と総括

### 10・8羽田実力闘争へ

### 佐藤訪米ベトナム侵略加担を

### 許すな!

#### 全国総結集体制を準備せよ

ジョンソン政権が戦争税と四万五千増派案を議会に提出して一層の侵略体制を固め、また南ベトナムでは人民大衆と無関係に「民政移管」の粉飾劇が演じられているなかで、佐藤政府は、ついに十月八日南ベトナム訪問と十一月十三日アメリカ訪問を決定した。いまや日本帝国主義は、ベトナム侵略加担の策謀の第一歩を大きく踏み出したのだ。これこそ七〇年安保Ⅱ日米反革命同盟へ向けての突破口であり、佐藤訪米・訪米阻止闘争は、今秋の政治闘争の一大焦点にほかならぬ。



佐藤内閣は、南ベトナム訪問出発を十月八日(日)午前  
十時半、続いてアメリカ訪問出発を十一月十三日と公然と  
発表した。

そして、九月二日の記者団会見においては、「南ベトナム  
訪問は自画自賛ではないが、相当のもの(成果)がある  
のではないかと思っている」

「十一月に米国を訪問する際、その前に南ベトナムに直  
接行くことによって、私の発言権は強くなる」と語り、

更に、十一月の日米会談において最大の焦点となる沖繩  
問題については、「最善の策が無理なら次善の策も考えね  
ばならぬ」と述べ「下田構想(核基地付き返還)につい  
て、真剣に考えなければならぬ」という極めて重大な警  
戒すべき発言を行ったのである。

この首相発言の中に、訪ベトナム、訪米の階級的意図が露骨に  
示されている。

「民政」へのテコ入れ↓アメリカ侵略体制の補強→これ  
が佐藤の狙いだ

では、佐藤首相の豪語する「相当の成果」とは何である  
のか?

それは、大統領選挙を中心とする南ベトナムの「民政移  
管」なるものに政治的テコ入れを行い、「民政」に政治的  
権威を与えることによって、アメリカのベトナム支配体制  
を補強することだ。そしてこの成果こそが、十一月日米会  
談における「発言権の強化」にもつながると彼等は考えて  
いる。

アメリカが、大統領選に冷淡な南ベトナム国民の投票符  
り出しに膨大なカネとエネルギーをつぎ込み、南ベトナム  
大統領選が「民主主義のすばらしい実例」であるとほめそ  
やす「官製視察団」を次々と現地を送りこみ、「まるで選  
挙をするのが、南ベトナムではなくて、米国のようだ」(九  
月二日・毎日)と言われるほど熱を入れてるのは、こ  
の大統領選挙を中心とする民政移管に、行き詰まりを深め  
ているベトナム戦争の打開の道を求めようとしているから  
だ。

ベトナム戦争の行き詰まり↓アメリカのベトナム階級斗  
争に対する支配体制の動揺は、この夏をとおしてますます  
争う余地のないものとなった。

八月二五日、米上院軍備委員会におけるマクナム国防

長官の「北爆拡大効果に対する懐疑論」は、まさにベトナム  
人民の英雄的持久戦によって泥沼にひきずりこまれたア  
メリカ帝国主義者の動揺を、最も端的に表現したものであ  
る。

このようなベトナム戦争の行き詰まり↓ベトナム・アジ  
ア階級闘争に対するアメリカ帝国主義支配の動揺に対して、  
ジョンソンは一方においては「北爆再強化」↓ベトナム戦  
争税の課税」↓「四万五千の増派」をもって臨み、他方  
においては、大統領選挙を中心とする「民政移管」によって、  
事態をとりつくりおおうとしている。

アメリカは、この民政移管劇を大々的に演出し、宣伝す  
ることによってベトナム戦争に不満を持ちはじめたアメリ  
カ国民を再結集し同時にベトナムの軍事的行き詰まりを政  
治的に打開しようとしている。だが、選挙に冷淡な南ベト  
ナム民衆の態度が示しているように「民政移管」は、全く  
見えずいた粉飾劇でしかない。

そして、選挙戦の結果はどうであったか。

チャー・キ軍部組は全ゆる不正手段に訴えて当選しはし  
たものの投票総数のわずか三分の一しか獲得していないこ

と、しかも首都サイゴンでは敗北していること、この事実  
こそは、軍部政権に対するベトナム人民の不満がうっ積し、  
軍部はますます人民から浮上がっていることを、明白に示  
す以外のなものでもない。

佐藤の南ベトナム訪問こそは、このように南ベトナム人  
民から完全に浮き上がった一握りの軍部官僚層の「民政移管」  
劇に政治的テコ入れを行い、それをとおして行き詰まりを  
深めているアメリカのベトナム支配体制を補強しようとする  
ものだ。

### 七〇年安保と核武装への策謀

#### 沖繩の核基地付き返還論

こうした「成果」をバックとして十一月中旬の日米会談  
において佐藤は何をやるうとしているのか。

佐藤はまず第一に、安保体制の堅持を大前提として、七  
〇年安保に向けての基本調整をジョンソンとの間に行おう  
としているのであり、

第二には、七〇年安保に向けて沖繩問題を処理しようと  
しているのである。

われわれがはっきりとみなければならぬのは、佐藤内

閣が、いわゆる下田構想（核基地付き返還）に、固まり始めた点である。

ベトナム・アジア階級闘争の激化・それに対するアメリカ帝国主義支配力の動揺、更に日本帝国主義の国内政治支配体制の動揺という事態の中で行なわれる日米会談において、沖繩問題が「核基地付き返還」の方向につき進む危険を明確にさせなければならぬ。

沖繩の核基地付き返還の意味するものは、  
第一に、アジアと日本の人民大衆の階級闘争に対する日本帝国主義とアメリカ帝国主義の反革命同盟の全面的強化であり、

第二には、日本帝国主義じしんの核武装への決定的布石であり、

第三には、施政権返還 伴なう国益ナショナリズムの推進によって、自民党 佐藤内閣の下への国民再結集を狙い、それによって、年内への政治体制を固めようとする点である。

### 小選挙区制への本格的着手

全学連・地区反戦に結集する戦斗的學生と労働者は、五・二八―七・九の砂川斗争を闘いぬくことによって、日本全国に政治斗争の新たなうねりを形成してきた。このエネルギーが、佐藤の訪ベトを阻止する闘いに向けて徹底的に組織し尽くされなければならない。

六〇年安保斗争において、岸の渡米を阻止するために全学連に結集する二二〇〇名の学生は最後の瞬間まで抗戦しぬいた。

目前に迫りつつある一〇・八の佐藤訪ベト阻止斗争において、全学連は闘いの中心部隊として全国から総結集し、ベトナム侵略加担反対の日本人民の決意をたたきつけねばならない。

さらに反戦青年委員会を軸として、「佐藤のベトナム訪問の抗議署名」活動をはじめとした、ありとあらゆる活動形態を用いて労組、職場の中に、訪ベト反対の声と力をほりおこしていこうではないか。

10・8佐藤の訪ベトに対して、抗議し抵抗し対決することをぬきにしてベトナム人民への連帯を語ることはできない。

しかもわれわれが、注目しなければならないのは、日本帝国主義の政治支配体制に議会民主主義体制の動揺に対し、佐藤内閣が、小選挙区制をもって本格的対応を開始した事実である。

準備されつつある小選挙区制はまさに行政執行権力の公然たる独裁以外のなものも意味しない。

ベトナムへの政治的介入↓沖繩問題の処理・それに基づくベトナム侵略加担体制の強化と自民党への再結集↓小選挙区制↓七〇年安保―このようにして、七〇年安保にいたる日本帝国主義佐藤内閣の政治的攻撃は急速に固まり出しているのであり、その第一歩が、南ベトナム訪問に設定されているのだ。

### 全学連・地区反戦の全力を

### 10・8羽田闘争に組織せよ

われわれの闘いは、まず第一に一〇・八羽田斗走に明確に設定されなければならない。

この秋の闘いの性格と帰すうは佐藤の訪ベトを阻止する闘いを、どれほど大衆的実力斗争として発展させられるかにかかっている。

### 10月反戦ストを闘いと

### 佐藤訪米阻止闘争へ

社会党・総評は、昨年の十月闘争に対しては、日教組・自治労の公務員共闘の賃金闘争に、ベトナム反戦のスローガンだけをくっつけて、ベトナム反戦ストライキの腰くだけをごまかし、ベトナム反戦闘争全体をも、ごまかし流していった。

佐藤内閣の訪ベトという日本帝国主義の侵略加担が公然と行なわれているとき、社会党総評は十月ベトナム闘争をどのように計画しているのか。

彼等は十月下旬（10・21予定）に「反戦メーデー」と銘打って、一定の人数だけかり集め、そこにアメリカの反戦団体のリーダーを呼んできて「国際統一行動」という名称をかぶせてお茶をにごそうとしている。

だが、日本の労働者階級人民に課せられている任務は、まさに佐藤がベトナムを訪問するその日（10月21日）に、自からの実力闘争ストライキ闘争をもって抗議の意志を表明することではない。

十月反戦ストは、10・8の訪ベト阻止闘争を組織し、

10・8闘争を闘いぬくことによってはじめて闘いとられるのだ。

十月の反戦ストについて、口先だけでしか語っていない社会党総評は、だからこそ佐藤の訪ベト阻止の闘いについては、言をにごしているのであり、

日本共産党にいたっては、一言もふれていないのだ。

わかれは、今春の砂川闘争とおして、地区反戦、全学連を両軸とする反帝統一戦線を全国的に形成強化し、日本階級闘争の公然たる実力部隊へと発展させてきた。

10・8佐藤訪ベト、十月反戦ストライキ、11・13佐藤訪米という日本階級闘争における重大な政治的対決点に対し、全学連、地区反戦の全面的強化をもつてのぞみ、闘いぬくうではないか。

10・8羽田闘争に向け全国から総結集する体制を準備せよ。

- 1 佐藤の訪ベト＝ベトナム侵略加担を許すな
- 1 沖繩の核基地付き返還反対
- 1 沖繩軍事基地撤廃・米軍を沖繩からたたき出せ

1 砂川基地拡張実力阻止

1 成田空港設置を阻止せよ

1 小選挙区制の賛助を粉碎せよ

1 佐藤の訪米を許すな

1 10月反戦ストを闘いとリ、佐藤訪米阻止闘争へ

1 日帝のベトナム侵略加担に全面対決せよ

1 日帝の軍事力強化・核武装・海外派兵を許すな

1 70年安保＝日米反革命同盟の強化を阻止せよ

(戦旗九月五日号)

## 虐殺抗議・「血の佐藤」のゴソ入り<sup>の</sup>に抗議の嵐を

# 10・21闘争を全大衆の反政府闘争へと発展させよ!

### 共産主義者同盟政治局

10・8闘争総括

#### (一) 10・8闘争の巨大な意義

「佐藤の訪ベト実力阻止」日本帝国主義のベトナム侵略加担を許すな」のスローガンの下、日本労働者階級人民の先頭に立った反戦全学連に結集する五〇〇名の戦斗的労働者学生は、十月八日、羽田を飛びたとうとする「加担の張本人」佐藤」に対し烈火の抗議を突きつけ、たたきつけた。

のアジア・ベトナム人民に対する軍事支配体制の動搖を補強するために、血とペテンと腐敗の一握りの「民政」に公然と連帯しテコ入れすることになった。

佐藤はまさしくベトナム人民大衆の解放斗争に真向から敵対するために羽田を立とうとしたのである。

それゆえわかれは10・8斗争における日本労働者人民の国際的国内的任務を次のように明確に設定した(十月五日号「戦旗」参照)。

第一に、日本労働者階級人民のベトナム反戦と佐藤の訪ベトナムに対する抗議の意志を、決然たる行動によって「公然」と表明し、

第二に、その行動によって佐藤の政治的權威にトロを塗り、失墜させ、

そして第三には、このように10・8闘争を文字通りの反帝実力闘争として闘いとることによって全世界の10・21ベトナム反戦闘争を反帝反政府闘争へと飛躍させる先進的任務を果たすこと。

そして同時にこれら三点の国際的国内的任務の遂行こそ、アメリカ帝国主義の侵略に抗し闘いぬいているベトナム人民に日本労働者階級人民が連帯する只一つの道でもあった。全都、全国の労働者学生諸君！

反戦：全学連が、京大の同志山崎君の虐殺、百名を越す重傷者、殆んど全員に加えられた敵階級の警棒の嵐、五八名の逮捕者という弾圧をはねのけ最初から最後まで断乎として闘いぬいたことによって、まさに10・8闘争において日本労働者人民に課せられた巨大な国際的国内的任務を敢然と完遂したのである。そして、それによってベトナム人

民に対する革命的連帯を闘いとったのである。

「ベトナム反戦」という日本労働者人民に課せられた任務が、たんに言葉や、お題目としてではなく、行動をもってこたえることにおいてのみ問われた時、社・共は行動はおろか言葉さえなかつた。

社会党は勝間田の前夜（十月七日）の談話の「戦斗的ボーズ」でお茶をにごし、日共はいたっては羽田から程遠い多摩湖畔の「赤旗まつり」に労働者を開いこみ、それを「佐藤訪ベトナムに対する大示威」（？）であるなどと居直った。このような社共の戦線逃亡と裏切りの中で地区反戦と全学連に結集した戦斗的労働者学生が10・8斗争における日本人民の巨大な国際的国内的任務を全身でうけとめその任務の決然たる遂行をおして10・8斗争を真の10・8斗争たらしめたのである。

この点にこそ、10・8斗争の巨大な意義＝革命的意義があった。

## （二）弾圧体制を揺るがした戦闘力

十月八日早朝から「佐藤訪ベトナム阻止」の固い意志のもと

に「高速道路一号線」（鈴ヶ森）↓「穴守橋」↓「弁天橋」と闘いぬいた地区反戦・全学連は、強力な目的意識性と戦闘力によって、数千名の官憲の弾圧をいたるところではね返し押し返した。

10・8闘争において、全学連・地区反戦の戦闘力が、権力の弾圧体制を揺さぶり脅かしたことで、六〇年六・一五闘争以来初めて強力な官憲の弾圧体制を実力闘争が打ち破ったこと、まさにその巨大な戦闘力によって、日本帝国主義権力、佐藤内閣の国際的權威を失墜させたのであり、

「日本はアジアで唯一の安定した国家」という日本帝国主義の国際的幻想を破綻させたのである。この「意気天をつく巨大な戦闘性」を切り開いたのは、八日早朝八時、社会学同八〇〇名を中心とした一三〇〇名の全学連による高速道路一号線（鈴ヶ森）での闘いである。

官憲の弾圧に対する防備に身を固めた社会学同を中心とする一三〇〇名が、佐藤の通過する高速道路に対して決然たる行動に起ち、官憲の壁を突破したこと——この闘いによって10・8闘争は、まさに切り開かれ、権力の弾圧体制を揺るがすことによって、日本帝国主義権力の国際權威を失

墜させる突破口が切り開かれたのである。佐藤の訪ベトナム阻止するためには、佐藤の通過する高速道路に向けて全力＝全行動を集中する——このことをおいて10・8闘争はな（中核派のセクト主義によって中核派はこの行動から脱落した）。安保以来（特に日韓闘争において）官憲の強力な弾圧の前に抑圧されてきた我々のデモが自からの力で事態を切り開いたこと、しかも佐藤の通過する高速道路において官憲の弾圧をつき破ったという事実が10・8闘争の全帰すうを決したのである。

八時半からの狭中公園の全国反戦の集会（一〇〇〇名、そのそばにやと着いた中核派学生五〇〇等もいた）の冒頭に成島副委員長が、高速道路の闘いの事実を報告するや、狭中公園全体はあふれんばかりの行動への意欲に湧き立った。反戦労働者だけでなく、そばにいた中核派学生も巨大な自信と自覚を鼓舞され、10・8闘争全体の任務の遂行にまで全体が引きあげられたのである。

反戦の労働者一〇〇〇が敵の全ゆる弾圧にも屈せず、強力なスクラムの下に斗い抜いたこと（穴守橋）——これは六〇年羽田斗争から六七年10・8羽田斗争を区別する最大の

革命的特徴である。しかもこの穴守橋には、高速道路で開いた社学同を中心とする一五〇〇名の部隊が断固として先頭に立ち敵の防害物を打砕いて闘いぬいた。更に稱荷橋の革マル派学生(二〇〇)、弁天橋の中核派等(六〇〇)の闘いによって「ベトナム侵略反対」日帝の侵略加担を許すな」という烈火の意志が、敵権力の弾圧体制を震憾させたのだ。

### (三) 日本帝國主義・佐藤内閣の國際的權威の失墜

佐藤の訪ベトナムに抗議する五〇〇〇の戦闘的労働者学生の意志と闘争が、官憲と機動隊の弾圧体制を脅かし、動揺させ、それを押し返したこと――まさにこのことによつて、第一に佐藤は一切の儀式を抜きにして飛行機に車を横付けにしたまま、そそくさと羽田を飛び立たざるをえなかった。第二に佐藤自身のみならず日本帝國主義権力自身の、政治的權威にドロが塗られ、國際的權威が失墜したのである。

たとえば「サイゴンの英字有力紙」は「佐藤、血の出発」として三段ぬきに報じ、「日本の役割についての悲觀的役割

の見方」をつよめ、最初の佐藤の訪問団であるインドネシアにおいても日本の反政府闘争の強大な存在によつて「大きなショックを受け」、又米国では、「佐藤首相の南ベトナム訪問反対で死者まで出す大デモ」とくり返し報じ一広範なベトナム反戦ムード」だけでなく激しい実力行使の発展した事実が驚かしている。

七〇年安保と沖繩問題の処理(日米会談・十一月)を目前にして、あるいは対東南アジアに対する政治的経済的介入をまさに本格的に行おうとしている日本帝國主義ブルジョアジーにとっては、「国内の安定」を基礎とした「國際的權威」が今日ほど必要とされている時はない。

まさに、その時に10・8斗争は、「アジアにおける唯一の安定国」という日本ブルジョワジーの対外的幻想を破壊させて、日本帝國主義の國際的權威を失墜させたのである。日本帝國主義権力、佐藤内閣の國際的權威を失墜させたこと――これこそが、10・8斗争の生み出した根本的事態である。

### (四) ブルジョアジーの巻き返し――死因フレイムアップを粉砕せよ

今まで確認してきたように第一に、羽田闘争の巨大な戦

闘力によつて、國家権力の弾圧体制がはげしく揺さぶられ、脅かされたこと、第二にそれによつて、日本帝國主義の國際的權威に重大な傷がついたこと、

第三に、虐殺とガス弾と警棒の嵐にも拘らず断固として闘いぬいた反戦・全学連の闘いによつて、ベトナム反戦問題に鋭い関心が集中し、ベトナム反戦闘争が反政府闘争へと発展する条件が生み出されたこと――

10・8斗争の生み出したこれら三点の國際的国内的結果に対して日本帝國主義ブルジョアジーは必死の巻き返しに出た。

「十月八日七時のNHKに対する報道管制」  
「全商業紙を通じた暴徒宣伝」

「六〇年安保六・一五との相違の強調」

十月八日の夜から始まった猛烈なブルジョアキャンペーンの焦点は、京大の同志山崎君の死が「官憲の手による撲殺ではなく、学生の運転した装甲車によるレキ死である」というデッチあげの宣伝に集中されている。

だが検死の際に、故山崎君の御両親の指定した立ち会い

人を含め一切の立ち会いを拒否したのは何故か。

死体が最初に運びこまれた牧田病院の死因についての最初の発表が「頭がい骨骨折」でありながら、その後三回も四回もくるくる変った死因を発表したのは何故か。

京浜蒲田病院では事情を見に行つた学生を「検挙」をもつて鳴したのは何故か。

日本帝國主義ブルジョアジーは虐殺の事態をカモフラージュするだけではなく、その責任を学生になすりつけ、すりかえる(「政治問題」の「刑事問題」へのスリカエ)という一大フレイムアップに大規模に踏み切つたのだ。死因のデッチあげによる「政治問題」の「刑事問題」へのスリカエ――これこそがブルジョアキャンペーンの焦点であり、

それによつて第一には、「政治問題」ベトナム問題」を「刑事事件」にスリカエることによつて、10・8斗争からベトナム問題を消し去り、10・8斗争とベトナム問題とを切断し、

第二には「刑事責任の追及」という形で全攻撃を全学連と地区反戦に集中し、この先進的部分を「一部暴徒」に

仕立てることによって、國際的權威の傷をとりつくろおうとしているのであり、

第三には、こうして広はんな大衆のベトナム反戦意識と10・8闘争との間を分断することによって、ベトナム反戦闘争の反帝反政府闘争への発展転化を抑圧しようとしているのである。

従って、この悪らつ極まりないブルジョアキャンペーンに反撃し、これを打ち砕くことは、10・8斗争の巨大な意義を大衆の中に定着化させ、更に10・21斗争を反帝反政府斗争として目的意識的に組織していく際に欠かすことの出来ない任務である。しかも、決して安易には考えることの出来ない任務である。

十月八日に、わいわれが何のために闘い、何を闘いとうとしたのか。

そして、十月八日の闘いの眞実は何であったのか——この二点を全大衆の前に明きらかにし、全大衆の中に持ちこまなければならない。

「政治問題の刑事問題へのスリカエ」に、ブルジョアジの反撃と巻き返しを中心がある以上、10・8斗争の政治

的事実、訪ベトに託している敵の政治的目的、それに抗した10・8斗争の政治的意義を全面提起することによって、労働者人民大衆の広はんなベトナム反戦意識を政治的に結集形成することこそが、ブルジョワジーの攻撃に對し、反撃していく道である。

### (五) 「血の佐藤」のサイゴン入り

抗闘争を全大衆の反政府闘争として組織せよ

十月二一日——この日こそ、「血の佐藤」が、ベトナムのサイゴンに入る日だ。この日こそ加担の張本人、佐藤がアメリカ帝国主義者の協力者としてベトナム人民の眼前に、公然と降りたつ日だ。

虐殺抗議、佐藤訪ベト弾劾、ベトナム侵略加担反対の旗の下、「血の佐藤」のサイゴン入りに対する抗議の嵐を作り出せ。

10・21斗争を、日本帝国主義権力・佐藤内閣に全焦点を絞った反帝反政府斗争として組織していこう。

10・8斗争を、反帝実力斗争として貫きとおすことによって、わいわれは、日本のベトナム反戦斗争を反帝反政府

斗争へと発展させる大きな突破口を創り出し、

佐藤訪ベトの國際的權威に打撃を与えることによって、

全世界のベトナム反戦斗争を反帝反政府斗争へと飛躍させる先進的任務を果たした(商業新聞さえも、アメリカ反戦運動への國際的波及力をみとめ、注目している。)またサイゴン大学学生連盟の連帯声明・中国の支持声明。

従って、10・21闘争の任務は、10・8闘争の切り開いた突破口を押し広げること——すなわち、更に関心を高めつつある大衆の広はんなベトナム反戦意識を闘争へと組織すること、しかもその闘争を「血の佐藤のサイゴン入り」に抗議し弾劾する反帝反政府闘争として闘いこなすことではない。

では、10・8闘争においては戦線から逃亡し、闘いを回避した社共は10・21闘争に對してはどうか

日共は、「10・8闘争は反動と反革命の対立」であるなどといつて、その果てには、同志山崎君の死因についても「虐殺」というニューアンスの報道をした十月九日号の赤旗の記事を撤回し、悪らつ極まりないブルジョアキャンペーンに公然と手を貸し始めた。

社会党・総評は、猛烈なブルジョアキャンペーンの圧力のもとに動揺の色を見せ始め、ベトナム反戦意識と虐殺抗議とを切りはなそうとし始めている。

社会党・総評は、まさに10・8羽田闘争によって、「悪いのは佐藤だ」という形で、ベトナム反戦意識が更に大きく揺さぶられ、反帝反政府闘争へと発展する条件が生み出された現時点において、敵のフレイムアップとブルジョアキャンペーンに屈服して、ベトナム反戦闘争を發展させるという10・21闘争の任務から今また逃亡しているのである。揺り動きはじめたベトナム反戦意識を大衆闘争に組織すること、それを「血の佐藤の訪ベト」に抗議し対決する反帝反政府闘争へと高めるといふ10・21闘争の巨大な任務は、まさに10・8闘争を断固として闘った反戦青年委、全学連の主体的任務となっているのだ。

全都全国の労働者諸君

○各地区反戦に結集し、10・8闘争の内容と意義をあらゆる戦場に訴えよう

○10・8闘争の報告会を職場・工場に組織しよう

○ブルジョアキャンペーンを打破するために、「戦旗」駅



頭販売を実行しよう

○戦場、工場で、ベトナム問題と虐殺問題を持ちこみ、討論し、10・21闘争を準備しよう

○10・21闘争を、労働者階級自身の闘い「ストライキとして闘いとうろろ」そのほこ先を、佐藤に集中せよ

○10・21を「血の佐藤のサイゴン入り」に対する「嵐の抗議の日」とせよ

○10・21を日本帝国主義、佐藤内閣に対する反帝反政府闘争として闘いとうろろ

○10・21を、労働者学生の一掃で闘いぬぐために、あらゆる準備を開始せよ

(六)

この闘いをおし進めよう。2  
佐藤訪米阻止、実力闘争の嵐  
闘争を切り開け、共産主義者  
同盟に結集せよ

大衆の中に入り、とけこみ、大衆の中からブルジョアキヤンペーンを一掃することによって、10・21闘争を巨大な大衆闘争として闘いと、反帝反政府闘争へと高めること

この現段階のベトナム闘争の任務にこたえる部分こそが真に10・8闘争を目的意識的に闘いた部分であり、また10・21闘争反戦統一行動の国際的任務にこたえることのできる部分である。

しかも、日本帝国主義ブルジョアジーは、ブルジョアキヤンペーン「フレームアップ」と攻撃の全力を「反戦」と全学連に集中している。

従って、その全攻撃の圧力を突破し大衆をブルジョア権力に対する反撃に組織し、10・8闘争から10・21闘争へ大衆闘争の発展を闘いとうることの出来る部分こそが、杜・共産に代る革命的前衛党の中核となることが出来る。

われわれ共産主義者同盟は、10・8闘争における日本人の巨大な国際国内的任務を真正面から受けとめ、それを明確に提議し、その完遂のために、先頭にたって闘いぬいた。

われわれは、10・8闘争の巨大な意義を定着化させ、更に10・21闘争へと発展させるために、全力を挙げて闘いぬくであらう。

10・21闘争を全大衆の反政府闘争として組織し発展させ

ることによって、11・12、佐藤訪米阻止、実力闘争への巨大な展望を切り開こう

全都全国の戦斗的労働者学生諸君

この闘いを断固としておし進めるために、共産主義者同盟に結集せよ

(戦旗十月十五日号)

声 明

**日本帝国主義の凶暴な弾圧・虐殺  
に抗議し、あくまでベトナム侵略  
加担阻止の闘いをおし進めよう!**

一九六七年十月九日

共産主義者同盟

「佐藤の訪ベトナム実力阻止」日本帝国主義の侵略加担を許すな、ベトナム反戦を反帝反政府斗争への旗印し、下のわが同盟を先頭とする全学連、反戦の戦斗的労働者学生は、10・8佐藤訪ベトナム阻止羽田斗争に起ち上がり、官憲の暴虐きわまる弾圧に抗して最後まで徹底的に闘いぬいた。官憲はデモの先頭にたった山崎君を虐殺し、数百名に上る

労働者、学生を自傷させた。これをものともせず反戦青年委に結集する先進的労働者と全学連学生は英雄的に闘いぬき、官憲を恐怖のどん底にたたきこんだ。ベトナム侵略加担の野望を担った佐藤は、労働者、学生、の烈火の如き抗議におびえ、逃げるようにして羽田を飛びたった。

この闘争により、佐藤の「權威」は一瞬にして地に落ち、侵略加担の策動は巨大な打撃をこうむった。ジョンソン政権はアメリカ国内の反戦闘争に火のつくのを恐れ、また南ベトナム政権は、「日本に対する期待が薄れた」ことを表明した。日本帝国主義の國際的權威を失墜せしめたこと、労働者学生の実力闘争をもってベトナム人民をはじめとする國際的な反帝・反政府闘争に連帯したこと——これこそ、羽田闘争の最も巨大な意義である。

いまや日本支配階級は、全ゆる國家権力と報道機關を動員して、失墜した政治的權威を回復し、闘いの全労働者階級人民への波及をくいとめるべく必死に巻き返そうとしている。国内のベトナム侵略反対闘争の拡大を恐れたブルジョアジーは、官憲の虐殺行為を学生の手によるものというデッチ上げで隠蔽し、一切の問題をたんなる「刑事問題」にすりかえようとしている。

そしてこうした事態の中で、社共既成指導部は無力性をさらけだした。社会党は完全な斗争放棄を七日の勝間田声明でとりつくり、10・8羽田斗争に対して「責任はあげて佐藤政府にある」という声明を出して自覚の倒閣運動に

利用しようとしたものの、翌日には、圧倒的なブルジョアの「暴力学生」キャンペーンにおされて方針転換するといふ御都合主義的動揺ぶりを暴露した。共産党にいたっては、「赤旗まつり」にうつつをぬかして羽田実力斗争に公然と敵対したあげく、「あれは反動勢力と反革命勢力との衝突だ」として、すっかりブルジョアジーの「暴力学生」キャンペーンの走狗になり下がった。

10・8羽田闘争は、その革命的な実力闘争によって日本支配階級と社共既成指導部を心底から戦慄せしめた。全國の先進的労働者、学生諸君、このベトナム侵略加担阻止の闘いをあくまでおしすすめ日本労働者階級人民全体の強力な闘いへと波及させ発展させるため全力をつくそう。われわれは、10・13全國反戦統一行動を皮切りに、10・21國際統一行動を日米帝国主義のベトナム侵略に反対する圧倒的大衆闘争として爆發させよう。十一月佐藤訪米阻止闘争を10・8闘争を上まわる大衆的実力闘争として闘いとうろ。

（戦旗十月十五日号）

# 11・12羽田実力闘争に 全都全国から総結集せよ！

## 侵略と抑圧の「日米安保体制」強化への道

# 佐藤訪米を阻止せよ！

### （一） 10・21國際反戦統一行動の成果

十月二一日、ベトナム反戦國際統一行動は10・8羽田闘争を受けついで東京六万を中心とする全國二十万の日本労働者学生人民の闘いと、米國史上最大のワシントンにおける二十万人の反戦デモ、ヨーロッパ諸国における労働運動と陵速したベトナム反戦闘争の胎動等を中心として先進國階級闘争の新たな高揚を切り開いた。

「われわれの敵は、ジョンソンである——」ジョンソン

### 11・12闘争方針

を前にしては、黒人も白人も変わらない——そして、「米國の平和勢力の抵抗は全世界の前に示された」というワシントン反戦集会における声は、アメリカ人民が、まさにベトナム反戦闘争をおして歴史上はじめて反政府闘争に公然と全國から起ち上りはじめたことを示した。

アメリカ人民が、ベトナム反戦の旗を高々と掲げて闘うこと——このことは、何よりもまず、第一にアメリカ支配階級の対世界支配政策の焦点に対して、アメリカ人民が反対し抵抗する決意を公然と表明しているということであり、

第二には、支配階級の対世界政策の焦点はベトナム侵略に対して反対することをとおして、まさしくアメリカ人民は、アメリカ帝国主義の国民結集政策（「反共・自由世界擁護」というイデオロギー支配）そのものに対して反対し抵抗する決意を表明し始めたことを意味する。

すなわち、アメリカ人民の10・21ワシントン反戦集会は、「徴兵拒否」の闘いを焦点として反政府斗争への公然たる発展の第一歩を切り開いたのである。

そして、10・8羽田実力斗争を決然と遂行することによって、全世界のベトナム反戦斗争の先進斗士としての任務を果たした日本人民の闘いも、「10・8斗争で切り開いた突破口を押し広げること」さらに闘心を高めたところある大衆の広汎なベトナム反戦意識を斗争へと組織すること、その斗争を「血の佐藤のサイゴン入り」に抗議し弾劾する反帝反政府斗争へと高めること」（「戦旗」十月十五日号）という、21斗争の任務にこたえるものとして闘いとられたのである。

10・8の革命的実力斗争によって播きまわられている大衆のベトナム反戦意識を反帝反政府斗争へと形成し組織する

共産主義者同盟は、10・8羽田実力斗争の巨大な意義を定着化させ、その切り開いた局面を發展させるために――すなわち「10・21斗争を全大衆の反政府斗争へ發展させるために」全学連と反戦の先頭に立って闘いぬき、10・21斗争を圧倒的に保障した。

共産主義者同盟は、革共同中核派等の絆念左翼の諸君たちが「10・8斗争の政治的総括、ブルジョアジーの巻き返しの性格、10・21斗争の任務と11・12佐藤訪米阻止斗争への展望を完全に見失っている中で、いち早くそれら全問題を実正面に提起することによって10・13全国反戦の統一行動を反戦の第一歩とさせ、10・17虐殺抗議山崎博昭君追悼中央葬を「単なる葬儀」から闘いの決意をこめたものに転化させ、それらの闘いをおして10・21斗争を全大衆の反政府斗争として全面的に保障していったのである。

このような10・8―10・21にかけての全事態の試練の中で、共産主義者同盟は情勢を切り開きうる部隊へと自から鍛えてきた。

全国の戦闘的労働者学生諸君  
10・21斗争の大衆的成果を不動のものとし、それを基礎

という10・21斗争の任務を真正面からうけとめ、その任務に主体的にこたえたのは、全国主要大学（同志社、中大等）のストライキ斗争をもって大衆的に決起した全学連と、反戦青年委員会の闘いであった。

東京五・〇〇を中軸とする10・21全学連の大衆的決起と、10・13全国反戦統一行動（東京八〇〇〇）、10・17虐殺抗議山崎博昭君追悼中央葬（八〇〇〇）を実現してきた戦闘的労働者学生闘いこそは山崎君の死因に関するデモチあげと暴徒宣伝によって、羽田を斗った先進的部分と一般労働者学生大衆との間を分断しベトナム反戦斗争の發展を抑圧しようとしたブルジョアジーの巻き返しを打ち砕いたのである。また羽田斗争を断乎として斗った部分が10・21斗争において広はんベトナム反戦意識を自己の周囲に強固に結集することによって、まさに次の闘い11・12佐藤訪米阻止斗争に向けて、より広はん主体的条件を形成したのである。

### 10.21のエネルギーを 訪米阻止斗争へ

全国の戦闘的労働者学生諸君

として、訪米阻止実力斗争を準備し闘いぬく体制を全力をあげて築かねばならない。

この闘いを断固としておしすすめるために共産主義者同盟に結集せよ

### (三) 日米安保体制強化への道 佐藤訪米を許すな

九月以来、佐藤が東南アジアを訪問し、10月21日に南ベトナムにおりたつたのは、まさに、訪米「佐藤・ジョンソン会談」のためであり、その手段としてであった。佐藤は、日本人民大衆の広汎なベトナム反戦意識の存在を計算に入れて、東南アジア歴訪計画に「和平追求」という看板をかかげた。だがしかし、10月21日羽田に帰ってくるや、「今は和平は手づまり」であるとし、「南ベトナム首脳も心から和平をのぞんでいる」、といて「キとチュ」をほめそやし「北が、話し合いに応じ、漫透作戦をやめるのが先決」と言って、東南アジア歴訪の全結論が、アメリカの態度と全く同じものであることを公然と表明した。

このように、佐藤が南ベトナムを含めた東南アジア諸国を現地でみるということの真の目的は「和平追求は困難」という口実をおして、南ベトナム政権とアメリカ帝国主義に加担し、補強する政策を日本人民に押しつける点にあったのである。今や佐藤は、10・8の羽田斗争、10・21のベトナム反戦斗争に真正面から対決して、日本とアジア人民に対する侵略と抑圧の日米安保体制の強化に向けて突き進もうとしているのである。

11月14・15両日の日米会談は、九月以来の東南アジア訪問や南ベトナム訪問に比較して、はるかに重大な意味をもっている。

そこでは、  
第一に、ベトナム・アジア人民の解放闘争によって限界を示しはじめたアメリカ軍事支配体制を、日本帝国主義が公然と補強する「補強の仕方」が問題にされようとしているのであり（いわゆる「極東の安全保障」に対する日本の分担の問題）

第二には、そのようなベトナム・アジア人民大衆の解放闘争に対するアメリカ軍事支配体制にとって沖繩がいかな

る位置をしめているのか、について、佐藤とジョンソンは固い意志統一を図ろうとしているのである。

そしてこのようなアメリカ軍事支配体制の内部に、沖繩の巨大な軍事基地を保持しつつ、その枠内での「沖繩返還」の程度とテンポについて調整をつけようとしているのである。

第三に、こうしてアメリカ支配体制の限界を補強するかたちで、日本帝国主義の対米関係における位置を高めるという「日米関係の新たな段階」を決定的に画すことによって、佐藤は党内ヘゲモニーを強化し、更に「所得政策」（宮沢構想）と小選挙区制を二つの柱とする国内攻撃政策を展開する体制を固めようとしているのだ。

五二年のサンフランシスコ講和条約によって、アメリカ占領軍（GHQ）は日本階級闘争の前面から一歩背後に退き、在日米軍は日本ブルジョアジーの国家権力をその軍事面において背後から支えつつ、对中国・ソ連及び対アジア階級闘争を封じ込め抑圧する体制へと転換した（日・米安保体制）。

そして、六〇年安保の改訂は、五二年以来の高度成長を

基礎として力量を増大させてきた日本帝国主義が、従来のアメリカ側の圧倒的なヘゲモニー（片務協定）に対し、日本側のある程度のヘゲモニーを組み入れさせようとした点に、中心問題があった（片務協定から、双務協定へ）。

日本帝国主義は、こうして国際関係の基軸（日・米関係を六〇年安保において再編成することによって、日韓会談を初めとする東洋アジアへの政治的経済的進出を始めたのである。この過程は帝国主義諸国の世界市場分割戦の、激化・後進諸国系列化の動向につき動かされて、六三年以降急展開してきたのである。

だが今や、日・米帝国主義ブルジョワジーにとって、五年の安保体制成立以来はじめての根本的困難が生まれてきた。

これは、ベトナム人民の徹底抗戦によって、アメリカのアジア支配体制が播らぎ出したことであり日本の政治支配体制（議会民主主義体制が流動し始めたことである。かくして、ベトナム・アジア階級斗争の激化と日本階級斗争の流動化に対する反革命同盟として、日・米安保体制を強化していくことが、日・米帝国主義ブルジョワジーの

死活問題となってきた。従って日本労働者階級人民にと

ては、安保体制強化の攻撃に対決していく任務は、今や最も重要な歴史的任務となっているのである。

またこの任務の遂行こそが、ベトナム人民の階級斗争に日本人民が連帯する巨大な道でもあるのだ。

#### （四）ベトナム侵略強化の刃（日米

##### 会談を突力阻止せよ

日・米会談から直ちに生まれてくるであろう結論は、今や明きらかである。

それは、ベトナム侵略のための国際的体制の強化である。日・米会談（佐藤・ジョンソン会談こそ、まぎれもなく、ベトナム人民の斗いを弾圧する侵略と反革命の刃を研ぎあげる場となるうとしているのだ。

このことは、沖繩問題のとり扱いかいにもよく示されている。

当初（六月段階）、佐藤内閣が一東南アジア（南ベトナム訪問——訪米計画）を発表した時点においては、彼等は、①アメリカの対アジア支配体制の強化・補強（いわゆる「安全保障」の分担）と、②「沖繩返還問題」とは、あ

る程度別々に考えていた。

しかし、九月ワシントンにおける日米経済合同委員会と三木・ラスク会談において、「極東の安全保障問題が第一の大前提であり、沖繩返還問題はその枠内の問題である」というアメリカ側の原則的立場をつきつけられた日本帝国主義・佐藤内閣は、当初（六月段階）の方向を再検討しはじめた。

そして、十月初旬の下田駐米大使の発言に鋭く示されているように、今や佐藤内閣は、「米国と共通のラインに立ち、極東の安全保障という観点から沖繩問題を考える——という現実的姿勢に倣ってきた（十月十三日付毎日新聞）」のである。

極東の安全保障——このことばの階級的意味は、ベトナム人民の階級闘争を弾圧し、東南アジア諸国の一握りの支配グループを支え、そして中国人民のエネルギーを封じこめ、日本階級闘争を体制的に抑制することによって、アメリカ及び日本支配階級の安全保障すること以外の何物でもない。

そのほこ先は、当面は言うまでもなくベトナム人民に向

けられているのだ。

これだけではない。11月、日・米会談において、日本帝国主義佐藤内閣は、まず一九五二年以来の日・米関係を大きく転換させる契機を築き、その国際的地位の向上をバックとして党内ヘゲモニーをつよめ国内攻撃政策に着手しようとしているのである。

その第一は、現時点の財政危機から生ずる負担を人民大衆の肩に全面転嫁することによってのりきろうとする所得政策の導入（宮沢権想）であり、

その第二は、最終答申の切迫した小選挙区制問題である。まさに、11月の日・米会談こそは、東南アジア、ベトナム人民に対する国際的攻撃と、日本労働者階級人民に対する国内的攻撃との決定的契機になるうとしているのだ。

### （五）羽田実力闘争に向け、 全国総結集体制を

だが、社・共は、10・8訪ベトナム阻止闘争を回避し、裏切ったと同じように、今また11・12訪米阻止闘争を避け、裏切ろうとしている。

社会党・総評は、11・9の沖繩を中心とした統一行動と11・20のベトナム反戦を軸とした統一行動によって、11・12の訪米阻止闘争の意義を低め、訪米阻止闘争そのものから逃亡しようとしている。

日共は、10・8闘争の時に「赤旗まつり」に労働者を閉じこめたと同じように、今度もスポーツ祭にうつつをぬかそうとしている。

このような社・共に、共通しているのは、切迫しつつある日・米会談に対する恐るべき過少評価であり、日・米会談を「沖繩返還」の方法を論ずる場所としてしかとらえていない政治的鈍感さである。

「基地の本土なみ返還までおける用意がある」という社会党の態度はまさに「沖繩問題は、抵抗と反政府の結集ではなく、国論統一の問題」という民社の立場と紙一重であり、基本的には、日本帝国主義に屈服しているものといわねばならない。

全国の戦闘的労働者学生諸君

11・12訪米阻止闘争において次の三点の任務を實現しよるではないか。第一には、決然たる実力闘争を闘いとる

こと。第二には、その実力闘争の周りに広汎な労働者学生人民を結集すること。第三には、それによって、再び日本帝国主義佐藤内閣の政治的権威に打撃を与えること。

### 全国の労働者学生諸君

☆「反戦」「全学連」の下に結集し、11・12佐藤訪米阻止闘争を直ちに準備せよ

☆10・21の広汎なエネルギーを戦う戦列に組織せよ

☆工場・職場・組合で、ベトナム反戦の討論を更に深め、

訪米阻止闘争へと発展させよう

☆社・共の闘争回避と裏切りを許すな

☆侵略と抑圧の「日・米安保体制」強化への道——佐藤

訪米を許すな

☆ベトナム侵略強化への刃「日米会談を實力阻止せよ

☆安保破壊、70年安保「日米反革命同盟の強化を阻止せよ

☆米軍を沖繩から叩き出せ、米軍政打倒

☆ベトナム反戦を反帝反政府闘争へ

☆11・12佐藤訪米阻止実力闘争によって全世界人民との革命的連帯を強化せよ

☆11・12羽田実力闘争に向け、全国総結集体制を築こう

☆この闘いをおし進めるために、戦闘的労働者学生は共産主義者同盟に結集せよ！  
(戦旗十月二十五日号)

# 侵略と反革命の日米会談Ⅱ 佐藤訪米を實力阻止せよ！

## 反戦、全学連の総力を羽田へ

11・12闘争方針

日本帝國主義に屈服する  
「社・共」の条件闘争の打破へ

社会党・総評それに日共は、口先だけで弱々しく訪米反対を唱えているにすぎない。(社会党の上部Ⅱ中執は「訪米に反対しない」ことさえ決定している)

日米会談が、従来の日米安保体制に初めての大転換(日

本とアジア階級闘争全体に対する国際反革命の武器への再編成)を与えようとしている巨大な事実について、彼等が完全に盲目だからである。

社会党・総評の「訪米反対」は文字通りの空文句であり、現実の彼等は「基地の本土なみ返還までならおいてもよい」という条件派そのものに転落しつつある。

今や社・共は、日米会談に臨もうとしている日本帝國主義ブルジョアジーに対して完全に無力である。

このことは、日米会談に対して組織されているただひとつの統一行動である11・9闘争(社共共闘)の性格の中に鋭く表現されている。

一沖繩小笠原の即時無条件全面返還・サンフランシスコ条約第三条撤廃を要求する国民大会」という名称に示されるように、11・9闘争の中から「佐藤訪米阻止」の旗じるしがおろされはじめています。

表向きは、沖繩基地の撤去を言いながら「基地の本土なみ返還」をもちつかせている社会党の条件闘争路線の狙いは、実は米軍政に対する沖繩人民の不满を丸ごとかかえこもうという虫のいいものであった。

だが「訪米前の党首会談を要求していながら、訪米反対では筋がとおらない」という自民党からの攻撃に動揺し、「沖繩問題は抵抗と反政府の結集ではなく、国論統一(基地の本土なみ)の場」という民社からの攻撃に対してほとんど抵抗がないという社会党の姿こそ、日米会談に対する彼らの条件闘争の無力性を示すものである。

しかも日米会談をめぐるアメリカ政府と佐藤内閣の動向を見きわめるならば、社会党がもちつかせ民社が大声で叫んでいる「基地の本土なみ返還」という条件のお願い路線が、彼等の甘い幻想の産物でしかないということは明きらかである。

この半年間の日米折衝において、明きらかにされたものこそ、実に「ベトナムにとって沖繩は不可欠であり、一切の前提は極東の安全保障に対する日本側の積極的分担」というアメリカ帝國主義の強硬な姿勢であり、同時に、そのアメリカ側の立場に共通に立ったという佐藤内閣の姿ではなかっただろうか。

このような「沖繩の軍事的意義に1%でもふれる形の返還の意志をたぬアメリカ」と「極東の安全保障体制を積極的に分担しつつその枠内での沖繩返還(核基地付き返還以外にない)を策動する佐藤内閣」に対して、それ以外の沖繩返還のあれこれの方法や条件をお願いしても無意味であり無力であり、最終的には核付き返還に屈服することにしかならない。

そればかりではない。



こうした既成指導部―社・共の案件闘争路線は、一沖繩を一環とする極東の安全保障体制への国際反革命体制だの強化を中心問題」とするという日米会談全体の反人民的反革命的性から、日本労働者階級と沖縄人民とを武装解除させるものだ。

まさに、来たるべき日米会談を契機として日本帝国主義は、一日本を含めた東南アジア全体の安全保障」について積極的方針を打ち出そうとしている。

それは第一に、ベトナム人民の英雄的な抗戦によって、戦後をはじめて限界を暴露し行き詰まりはじめたアメリカの対アジア反革命支配体制を補強する地位に日本帝国主義自身が登場すること。第二にベトナムとアジア人民の解放闘争を抑圧・弾圧し、一握りの軍事支配層をバックアップするための日米協力(日米反革命同盟だ)に全面的にふみきること。第三に、中国人民大衆のダイナミズムの国際的波及を封じ込めること、そして第四には、こうしたベトナム・アジア階級闘争に対する反革命的介入をとおして、日本におけるブルジョア政治支配体制の流動化とアジア階級闘争の巨大な激化との結合を分断することを意味し、狙っ

ているのである。

今や日米会談を巨大な契機として、日米安保体制は、日米帝国主義ブルジョアアジアの日本とアジア階級闘争の発展に対する国際反革命の武器に再編成され、研ぎすまされようとしている。

当面の最大の矛先がベトナム人民の解放闘争に指し向けられることは火を見るよりも明きらかである。

佐藤訪米阻止の旗を高々と掲げ日米会談全体に対決する闘いへと前進しようではないか。

### 11.12 羽田闘争における

#### 反戦・全学連の歴史的任務

日本共産党は、社会党のちらつかせている「基地の本土なみ返還」に対して「根拠のない幻想である」として左のポーズをみせ、安保破壊と小選挙区制反対をスローガンに加えて、11・5集会の組織に血まなことなり、「敵に打撃を味方に勇気を」などと言っている。

「基地の本土なみ返還が根拠のない幻想である」ことを真に暴露していくのは、日米会談そのものに対して対決すること、佐藤の訪米そのものに対して対決することをぬき

にしては断じてありえない

安保破壊―安保体制打破を掲げるということは、まさに日米安保体制が侵略と反革命の武器に再編成され研ぎすまされようとしている日米会談―佐藤訪米に対する実践的対決を闘いぬくことではなければならない。

小選挙区制反対を真に掲げるといことは、日米会談における日米安保体制の再編成をバックとして、内閣改造―小選挙区制と所得政策の導入に着手しようとしている佐藤政府の全動向に対して対決すること、すなわち国内攻撃の突破口としての日米会談―佐藤訪米に対する闘争をぬぎにしているありえない。

日米会談全体―佐藤訪米そのものに対する闘いをぬぎにしたあれこれのおしゃべりは、日本帝国主義に屈服するものでしかなく、日本人民の歴史的任務を裏切るものでしかない。

「敵に打撃を与える」ということは、佐藤の訪米の瞬間に赤旗まつりにうつつをぬかし、今また佐藤の訪米そのものに対する当日の現地行動から一切召還して、「戦場地域のネバリ強い活動」をのんびんだらりと続けるといふこ

とではない。

「味方に勇気を与える」ことの真の姿を、10・8羽田実力闘争に対するハノイ・サイゴン・北京・アメリカ・ヨーロッパの国際的支持が、何よりも雄弁に明きらかにしたのではなかったか。

日米会談―巨大な歴史的転換点を前にして、社・共の条件闘争路線の無力性は余すところなく明きらかとなっていた。

日米会談全体のもつ反人民性・反革命性全体に対し、社・共の条件闘争の無力性をのりこえて「訪米阻止」の旗の下に闘う歴史的任務は、地区反戦・全学連を先頭とした戦闘的労働者学生人民の肩に課せられている。

10・8羽田闘争は、疑いもなく日本帝国主義佐藤内閣の国際的権威に打撃を与え、社・共既成指導部の動揺性を白日の下にバクロさせた。

10・21闘争は、日本帝国主義に対するおびたしい不満と抵抗を基礎として、日本労働者階級人民の中にベトナム反戦闘争が昂揚を開始したことを示すと共に、ヨーロッパ・アメリカにおけるベトナム反戦闘争の爆発をもたらし、

先進階級斗争の新たな昂揚が後進階級斗争の巨大な激化と結合を始めたことを明白に示した。

この先進階級斗争の新たな胎動と後進階級斗争の激化をプロレタリア世界革命へと発展させていく任務こそが、日本階級斗争の歴史的任務、日本階級斗争の中の先進部分の主体的任務である。

10・8斗争において日本階級斗争の先進部分は、まさに10・21国際反戦斗争を「反帝反政府斗争へ」と発展させる国際的突破口を切り開くことによって、その歴史的任務の第一歩を斗いとった。11・12羽田実力斗争はさらに力強い第二歩とならなければならない。

全大衆の先頭にたち、日米会談全体に対する対決へ前進せよ。

社・共の無力化した条件斗争路線を打破し11月12日羽田現地斗争を実現し斗いとろう。

この斗いをおして、地区反戦・全学連を両軸とする反帝統一戦線を強化し、安保体制打破を実現する日本階級斗争の戦斗的潮流へと発展させよう。

11・9に全大衆と共に総結集し11・12羽田実力斗争を斗

いぬこう

(戦旗十一月五日号)

## 11・12闘争の巨大な意義とわれわれの任務

ベトナム・安保を闘いぬく

反帝統一戦線（反戦全学連）を発展させよ

共産主義者同盟政治局

### 10・8闘争と11・12闘争

の巨大な意義

11月12日羽田現地に結集し、佐藤訪米阻止のために全力を尽して斗いぬいた全都全国の労働者学生諸君

10・8斗争からの斗いに注目し支持を寄せている全国各地の職場学園の労働者学生諸君と「戦旗」の読者諸君

11月12日の羽田斗争は、その質と量において、10月8日の斗いをはるかに上回る巨大な実力斗争として、斗いとら

れた

10・8斗争はその徹底した実力行動によって、無力化した社共既成指導部の下でうっせきしていたエネルギーをひきつけ、10・8斗争を上まわる11・12斗争を生み出したのである。

10・8斗争が生み出した11・12斗争の巨大な意義は次の五点にあるとわれわれは考える。

第一に、社・共が日米会談全体の反人民的反革命的性格を全くみこころい出さず、沖繩返還の条件斗争（佐藤政府

に對するお願ひ斗争)に転落し、現地羽田斗争を回避して  
いる中であつて、反戦青年委員会を中軸とした戦斗的労働  
者が、現地羽田斗争の方針を自から斗いと、三、〇〇〇  
名の大結集を実現するとともに動揺する全国反戦指導部を  
のりこえて戦斗的デモを斗いとしたこと。

第二に、二、〇〇〇を上回る社学同を中心とした全学連  
四、〇〇〇、その他含めて五、〇〇〇名という「安保斗争  
以来最大の全国動員」(朝日新聞11月13日)を実現した学  
生運動が、前夜(11日)における敵権力の弾圧攻撃を突破  
して、七七発のガス弾の雨と七〇〇〇名の武装官憲を中心  
とした「機関銃とピストルがないだけ」の極限的弾圧体制  
に一步も屈することなく徹底抗戦を貫きとおしたこと

第三には、10・8にひき続いて再び支配階級の国際的権  
威に重大な打撃を与え、しかも実力斗争の質と量が、10・  
8をはるかに上回ったことによつて支配階級を動揺させた  
こと。

第四に、この敵権力と正面对決した実力斗争の貫徹によ  
つて、まさに日米会談がベトナム侵略の刃であり、また日  
本人民とアジア解放斗争に対する反革命体制へと日米安保

## 二、敵権力の事前攻撃とその突破

### 羽田現地闘争を保障したもの

われわれ誰もが知っているように、10・8闘争によつて、  
弾圧体制を揺さぶられ、その国際的權威を失墜させられた  
日本支配階級佐藤内閣は、11月12日の佐藤訪米の遂行のた  
めに現行の権力装置の下でなしうるあらゆる手段をもつて  
のぞんできた。

何故なら、日米關係に日米安保体制こそ、日本帝国主義  
の存立の基軸であり、従つて日米会談に向けて飛び立つ際  
に再び10月8日に匹敵する実力抵抗が登場する場合には、  
日本帝国主義の国際的國內的權威全体が問題となる危険性  
を彼等がおそれていたからである。

こうして支配階級は、一方において社・共をどう喝して  
労働者階級及び反戦青年委の現地実力闘争の圧殺をはかり、  
他方において全学連の現地実力闘争を事前にたたきつぶす  
ために、四大学(中大、明大、法政、早大)当局に「とま  
りこみ拒否」を発表させ、大学とまりこみの破壊に12日前  
夜における全国実力部隊の粉砕を目論んだのである。

このような敵権力の事前攻撃と既成指導部の動揺の中で、

体制を再編成する大転換点であること、それに沖繩問題も  
その安保体制の反革命的強化の一環に位置付けられている  
ことを日本の全人民の前にバクローし、同時に社・共の沖繩  
返還の枠内での条件斗争(日米会談との正面对決を回避し  
た佐藤政府に對するお願ひ斗争)の無力性と限界とを暴露  
したことであり、それによつて日本労働者階級の中にう  
積する不満とベトナム反戦意識を反帝反政府意識へと深く  
ゆり動かしたこと。

そして第五には、10・8以降の支配階級の猛烈なマスコ  
ミキャンペーンによる分断攻撃、日米会談全体に抵抗しえ  
ない社・共の条件斗争路線、敵権力の事前攻撃と12日当日  
の極限的弾圧攻撃に對決して実力斗争を保障し斗いぬくた  
めには、明確な政治的組織的方針によつて武装された革命  
的前衛の登場が一切の鍵であつたこと、そしてわれわれ共  
産主義者同盟がそれをなしうる実践的力量をもつた唯一の  
党派であることが敵権力との試練の中で明きらかにされた  
こと——以上の五点こそが、11・12斗争のもつ巨大な意義  
であるとわれわれは考える。

現地行動への大衆的意欲に徹底的に依拠したわれわれの突  
きあげによつて現地闘争方針から動揺する全国反戦指導部  
とその動揺に巻きこまれた東京地区反戦の中の一部をのり  
こえて、11月7日全国反戦の羽田現地闘争方針の決定をか  
ちとつたことこそ、11・12闘争を切り開く突破口を作り出  
したのである。

こうした中で、敵権力の事前攻撃をはねのけて、11日の  
全学連統一総決起集會を実現し、全国実力部隊の統一宿泊  
を実現しぬけるか否かが、12訪米阻止闘争の帰すうを決す  
る焦点となつた。

一部セクト集団に中核派幹部にいたつては統一宿泊一実  
力体制の維持の方法については、考えてみることもさへも出  
来なかつた。

これらの口先だけは空文句を並べることが出来ても実践  
的には無力な諸グループに對し、二、〇〇〇を上回る自か  
らの実力部隊をふまえたわれわれは、敵権力の事前攻撃を  
革命的に突破し、翌日の現地実力闘争の展望を切り開いた  
のである。

われわれは、全学連書記局内部の一部セクト集団(革共

同中核派幹部)の策動を完全に封じて、11日夜中央大学において全学連全体の統一総決起集會を闘いとり、そこから東大教養学部全体を移動させここに統一宿泊することによって、12闘争に向けての全国実力闘争体制を全面的に維持し保障したのである。

この前夜と前段階における全国実力闘争体制の維持・保障と、われわれの突きあげによる全国反戦における現地闘争方針の決定のもとに、はじめて12日の闘いは保障された。

### 三、実力闘争の飛躍的發展

#### 11. 12闘争と全学連

11月12日の全学連を中心とする実力闘争はたんにその全国動員数において、「安保斗争以来の最大の規模」を実現しただけではない二、〇〇〇を上回る社学同を中心とした全学連四、〇〇〇の斗争はその質において10・8の実力斗争の水準を一段と飛躍させたのである。ここにこそ、11・12斗争の革命的核がある。

中核(五〇〇)の部隊がほとんど実力斗争の真剣な用意をしていないにもかかわらず、社学同のほとんど全員を中心とした実力斗争体制部隊は10・8を数倍した。

10・8斗争においても、高速道路の占拠と穴守橋の闘いを経て、山崎博昭君の虐殺に抗議する最後の全体デモは、その時発射されたガス弾とそれに続く襲撃の前に闘いの幕を閉じた。

11・12斗争が、一カ六〇年の6・15斗争と根本的に異なるのは、敵権力が決め手としてこれまで用いてきたガス弾を対決の最初から先制攻撃として用い、七十七発も乱発したこと、それに対して一歩もひるむことなく煙の中を徹底対決しぬくことによつて、敵権力の決め手を失わせたこと、である。

それだけではない。

ガス弾の先制攻撃、その乱射、七〇〇〇名の武装警官によるデモ隊に対する大包围、数百名の私服による無差別逮捕等の大弾圧によつて味方の戦線が分散し押しもどされたにもかかわらず、再度京浜蒲田に結集して敵のジュラルミンの盾に対抗して丸太を先頭に敢行した実力デモの戦斗力は、ついに敵権力の弾圧体制を揺るがし、阻止線を後退させたのである。

しかも、二〇〇〇を上回る実力斗争部隊は、白兵戦にお

こうした社学同を中心とする鮮明な目的意識性で武装された実力斗争体制部隊に対し、権力は現行枠内での極限的弾圧体制を布いた。

彼等は七〇〇〇の武装官憲を動員し、手にジュラルミンの巨大な盾をもたせ、デモ隊を見つけるやただちにガス弾を乱発し、全員無差別逮捕の方針のもとに大弾圧体制を布いたのである。それは、敵の側においても10・8をはるかに上回る極限的弾圧体制であった。

この10・8をはるかに上回る敵の極限的弾圧体制に対して、特に七十七発のガス弾の雨に抗して一歩もひるむこと徹底対決を貫いたこと、部分的には敵権力の阻止線を二度にわたつて突破したこと(二時三〇分と四時・大鳥居)白兵戦においては敵権力を圧倒し去つたこと、このような事実こそ11・12斗争における実力斗争の飛躍的發展をさし示している。

六〇年安保斗争のクライマックスをなしたあの6月15日の夜半においても、官憲が数発のガス弾を打ち込むや素手のデモ隊は襲撃する機動隊の前に四散し、闘いを終らせざるをえなかつた。

いて敵を圧倒しさせることによつて、その鮮明な目的意識性と戦斗性とを明確に示した。

10・8斗争からわずか一ヶ月たらずにおいて、しかも猛烈なマスコミキャンペーンにもかかわらず社学同二、〇〇〇〇を中心とする実力斗争体制部隊の闘いとなつたこのような実力斗争の質・量両面における飛躍的發展こそ、今や日本支配階級を恐怖の淵にたたきこんでいるのであり、しかもこうした10・8を偉大な突破口とした11・12の実力斗争の拡大と發展が日本階級斗争の内部に根強い基盤をもつたものであるという事実が、まさに日本支配階級に対して根底からの動揺を与えているのである。

#### 四、反戦三千の大結集と

##### 戦闘的デモへの意欲

全学連の実力闘争の飛躍的發展とともに、11・12闘争の生み出した巨大な意義は、三、〇〇〇〇名の戦闘的労働者の現地羽田行動へのはげしい意欲であつた。

既成指導部社会党・総評の動揺(「訪米反対闘争」の旗をあいまいにさせ、沖繩返還条件闘争Ⅱ対佐藤圧力闘争への転落)とそれによつてひきおこされた全国反戦指導部の

羽田現地方針からの動揺、その結果生まれた11月7日までの無方針状態にもかかわらず、われわれの突きあげによって、「日比谷12時↓羽田3時」という現地闘争方針が決まると、その一反戦の現地闘争方針のもとに、日本労働運動内部にうっせきし、こずまされてきた行動へのエネルギーが急激に結晶したのである。

12日十二時半日比谷野音の集会に結集した五、〇〇〇の労働者のうち三、〇〇〇が現地行動に参加したこと、しかも集会はそのこゝにして駆けながら羽田現地向かったこと、現地六郷公園においても演説の一切ないまま行動への緊迫感に全体がみなぎったこと、そして一〇〇〇を上回るヘルメット行動隊を先頭としたデモが敵の阻止線（大師橋）と羽田空港に向けてひた走ったこと、これら12日の「反戦」の斗いにおいて示された事実は、10・8を数倍する三、〇〇〇の労働者の結集が、まさに10・8斗争の生み出した行動への結集であったということ。すなわち動揺し無力化した社会党の議会内斗争や日共の実力行動に敵対したカンパニア集会をのりこえた「行動」によって打開するための行動への結集」であったことを明確に示している。

機動隊が登場、大師橋上にて官憲との正面对峙にまで発展したのである。「官憲の壁に対して実力対決をもって前進するか、否か」——こうして「反戦」にはじめて問われた対決を前にして全国反戦指導部の動揺は極点にたっし、ついに彼等は機動隊とのボス交によって機動隊の間に道をあけさせることによって前進をはかるかたまたで逃げたのである。

### 五、社・共の無力性と「行動」による結晶の時代の開始

われわれは、このような11・12現地闘争の中に、そしてまた11・12現地闘争方針の決定にいたる過程の中において、次のことを明確にみきわめ確認する必要がある。

それは、日本労働運動内部・日本人民全体の内部に、社会党の議会内とりひき闘争とそのためたんなる圧力的大衆闘争や、日共の実力行動に敵対した日常的諸要求カンパニアの無力性をのりこえて現状打開のうっせきしたエネルギーが行動への結集を始めつつあるという事実である。10・8闘争への反戦一、五〇〇の結集、11・12「反戦」三、〇〇〇の結集、そして「安保闘争以来最大の全国動員」を

この三、〇〇〇の大結集を生み出したエネルギーの質にこたえること、このことこそが12日現地羽田の「反戦」デモにおいて問われた根本的問題である。

だが、一〇〇〇を上回るヘルメット行動隊を先頭とし戦斗的行動への緊迫感に満ちた「反戦」のデモ隊が直面したのは、まさに11・12斗争の前段階において羽田現地方針をめぐってひきおこされたと同じ事態——すなわち行動を抑えようとする全国反戦指導部の動揺、それにひきずりこまれて戦斗的行動への発展を上からいっしょになつて抑えようとする一部の社青同解放派指導部の動揺であった。

だが、まさしく三、〇〇〇の大衆は行動のために結集したのであり、官憲によって勝手にねじ曲げられたデモコースをおとなしくデモするためにだけ羽田に来たのではない。

こうして、戦斗的行動への発展を上から抑えつけようとする全国反戦指導部とそれに連帯する一部の社青同解放派指導部に対して、解放派大衆も含めた全大衆の不満と突きあげが爆発し、われわれを先頭としたはげしい突きあげによって、彼等の数度に及び日利見主義をのりこえてデモ隊は産業道路上にまで前進し、ついにデモ隊の眼前に数百の

みせた全学連の結集は、それらの氷山の一角であり、また由比忠之進氏の焼身自殺抗議も本質的には同じ性格のものといわねばならない。

今やまさにこうした10・8と11・12の羽田現地「反戦」デモへの大結集と戦斗的デモへの烈しい意欲に表現される形で、日本階級斗争の根底から新たな高揚が始まっているのだ。

六四年を境とする日本資本主義の高度成長の行き詰まりは、日本帝国主義ブルジョアジーをして労働者人民大衆に対する攻撃へと駆りたてた。その攻撃からの圧迫によって、労働者人民大衆の中には抵抗・不満・要求がうっせきしつつも、同時にその資本攻撃の前に屈服し無力化しはじめた社会党の議会内とりひき斗争や組合主義的とりひき斗争は、まさにその無力性によって急速に大衆の結集力を失ってきただけではなかつただろうか。

こうして六四年4・17ストライキを契機として、一方において国家権力と資本の政治経済的攻撃と日本帝国主義のベトナム侵略加担の攻撃は激化し大衆の現状打開のエネルギーとベトナム反戦意識はうっせきしつつも、他方において

既成指導部の議会的組合主義的とりひき斗争の無力性によって労働運動・政治斗争は、その転機が叫ばれながらも全体として混乱する局面に入った。(六五年の日韓斗争・六六・六七年春斗)

だが今春の砂川斗争において端緒を切り開き、10・8・10・21・11・12において明確になったのはまさにわれわれを先頭とした実力政治行動が、社会党の議会的とりひき斗争、共産党の日常的要求斗争の無力性を打破する道をさし示した事、その実力政治行動に向けて労働者階級人民大衆内にうっ積し、今までこずんできた現状打開のエネルギーが動きはじめつつあることである。

10・8斗争は行動自身が次の行動を生み出し結果するといふ「行動による結集の時代」を切り開いたのである。

この事実こそ、それが日本労働運動全体の中において場合どんなにささやかなものであっても、まぎれもなく「新たな動き」の先端部分であり、日本階級斗争がその根底から新たな高揚へと動き出したことを最も鋭く示すものである。

われわれは、10・21国際反戦統一行動の世界的展開の中

から――すなわちヨーロッパ労働運動の激化と密着したヨーロッパ諸国の反戦斗争の高揚、アメリカ反戦運動の反政府斗争への転化、そして日本における10・8実力斗争の遂行を突破口とした10・21ベトナム反戦斗争の労働者学生人民内部における広はん高揚等の中から、第一に今や先進

国階級斗争が新たな高揚を開始したこと、第二にその後進国階級斗争の新たな高揚の開始がベトナムを中心とする後進国階級斗争の巨大な激化と結合しつつあること、そして第三には、それらの全体こそ来たるべき世界革命に向けての胎動であることを明確にさせた(戦旗十一月五日号二面参照)。

こうした中で日本における10・8を突破口とした10・21・11・12の実力斗争の質的量的両側面における飛躍的発展こそ、まさに日本階級斗争が先進国階級斗争の新たな高揚の焦点に位置していることを明白にさせている。

### 六、11・12闘争が暴襲した革共同 中核派幹部の破産と社青同解放派の矛盾

10・8以降11・12にいたる約一ヶ月の時期は、日本の革

命的左翼全体を初めて敵権力との対決関係の中において実践的試練にかけた。その第一は、10・8に対する支配階級を先頭とした日本の全勢力からの反暴力キャンペーンの嵐の中で10・8をどのように総括するかという課題をめぐって(具体的には山崎博昭君の追悼葬の性格をめぐって)である。

その第二は、10・8斗争の生み出した国際的国内的結果を冷静に分析してそれをどのように発展させるかという課題(具体的には10・21斗争の任務の設定)をめぐってである。

その第三は、10・21斗争を冲繩返還の枠内の条件斗争へとひきつこうとする社・共に対して日米会談の本質的性格をいかにとらえるか(具体的には11・12斗争の任務は何か)をめぐってである。

その第四は、敵権力の事前攻撃と12日当日の大弾圧体制とに對してどのように実力闘争体制を保障しまた実力闘争戦術を保障するかという課題をめぐってであった。こうして明らかなとおりこの実践的試練とは、敵権力との直接的対決関係の中において、社・共に対決する革命的前衛を

どの党派が担いうるかを問いただした試練でもあった。

そうして、この一ヶ月間の実践的試練が冷酷な事実を以て明きらかにさせたものは、これら四点の実践的試練に何ひとつこたえることの出来なかつた中核派幹部の完全な破産であり、社会党、全国反戦指導部の動搖にひきずられて生み出された社青同解放派の上と下の矛盾の表面化であった。

すなわち第一の課題に対して、革共同中核派幹部は、まさに10・8斗争の全社会的総括の場であった10月17日の追悼葬を小ブル市民主義的性格の「国民葬」にすることに構改諸派との右翼メンシェヴィキ連合の形成によって最後までしがみついたのであり、そのことによつて彼等の10・8斗争に対する総括が構改諸派と全く同じものであることを自己暴露させたのである。(嵐の時がすぎたあとならば人は何とも言える。)

第二の課題に対しては、まさに「10・12斗争を『血の佐藤のサイゴン入り』に對する全大衆の反政府斗争へ発展させる」という大衆斗争方針の実現こそわれわれの任務であったが、革共同中核派幹部は、全体の二割の動員さえも実



現しえず、社会学系の圧倒的大量動員の前に、その政治方針の貧困さを完全にさらけ出したのである。

第三の日米会談の本質的把握と11・12斗争の任務の設定という点において、中核派幹部は、「侵略と反革命体制」への日米安保体制の再編成という本質的性格を何らみるこゝとが出来ず、その結果として「沖繩の祖国復帰」という社・共条件斗争の枠内にすっぽりとはいまきこんでしまったのである。

こうした社・共と同次元の把握の下で、どうして11・12実力斗争体制が準備出来ようか。

中核派幹部の「再度弁天橋へ」というスローガンは完全な空文句となつて空中をまき、12斗争のためのブラカードを12日の朝東大駒場にて作るという有様となった。そればかりか、彼等幹部の12斗争における目的は、敵権力との徹底対決にあつたというよりは、午後六時からの国電蒲田駅における市民向けの革共同集会におかれていたのである。

そうしてそのあとで事前にチャーターしておいたバス数台で、その集会の大衆を三里塚にもっていくという考えられもしないひきまわしと日和見主義を12日にやったのである。

口されたのである。

#### 全都全国の労働者学生諸君

われわれ共産主義者同盟は、10・8の生み出した事態に真正面からこたえ、10・21闘争の大衆的高揚の最先端に立ち、11・12闘争を切り開いた。

10・8以降の試練の一ヶ月間に全面的にこたえ、11・12斗争を10・8を質・量ともに上回る実力斗争へと飛躍的に発展させるただ一つの原動力としてわれわれは斗いぬいたのである。

われわれは、全学連全体をさらに革命的に強化し打ちかため、「反戦」が11・12のデモ（大師橋）において直面した限界を主体的に打開するために「反戦」を文字通りの実力斗争部隊へとさらに一歩高めることに死力を尽すであろう。この作業こそが、社・共に対決する革命的前衛へとわが同盟を発展させていくに際しての現段階におけるわれわれの党的主体的任務であり、この斗いをおして、「反戦」・「全学連」を両軸とする反帝統一戦線の飛躍的強化を実現しなければならぬ。

そして、まさに日本階級斗争の根底からゆり動きはじめ

る。

11日から12日にかけて、五〇〇名のマル学同中核派の自称「主流派」の部隊は、二、〇〇〇を上回る社会学を中心とした三、〇〇〇の主軸部隊の補足物となつてしまった。

それはちょうど全学連にいつも後からついてくる革マルと同じ位置に転落したことに同じであり、そこにマル学同下部大衆を追いこんだことこそが中核派幹部の破産の証明である。

この破産した中核派幹部を解体すること、——今やこれは、階級闘争の利益を第一に考える全ての革命的左翼の共通任務となつた。

そしてすでにわれわれが見たとおり「反戦」の現地羽田闘争において最も鋭くバクろされたものこそ、社会党内分派にすぎないという社青同解放派の決定的限界であつた。

全国反戦の動搖と日和見主義にひきずられて一部社青同幹部が、戦關的行動への大衆の意欲を抑える側にまわつたこと、それに対して社青同解放下部大衆までもが不満を爆発させたこと——このような社青同解放派の社会党内分派としての矛盾が、まさに上と下の対立として表面化しバク

ている。「現状打開の行動への結集」に徹底的に依拠しこれをほりおこすことによつて、「行動による結集の時代」を更に切り開くであろう。実力斗争の質と量をさらに発展拡大し実力斗争を永続化させることによつて、七〇年安保を巨大な全国的反帝実力斗争の一大焦点として準備しその斗いをおしてプロレタリア日本革命と世界革命への展望を切り開かねばならない。

#### 七、破防法適用を中心とする敵権力の 大弾圧の動きを粉砕せよ

10・8の実力斗争と一カ月余りで質・量ともにそれを上回つた11・12実力斗争によつて動搖し、現行弾圧体制に不安を感じはじめた支配階級は、全学連に対する破防法適用を具体的に日程にのぼせはじめた。

この動きは、たんに破防法適用をどう喝として使つた10・8直後とは明らかに次元が異なる。

彼等は、日本労働者階級と人民内部に巨大な現状打開の要求とエネルギーが存在していること、それが10・8と11・12の深部に横たわつていて、そして労働者階級自身

の行動が実力斗争に発展する危険性を感じているからこそ、  
全学連に対する破防法適用を具体的に検討しはじめている  
のだ。

それは、明きらかに日本労働者人民の階級闘争の新たな  
高揚に対する反革命的策動であり、七〇年安保に対する敵  
の先制攻撃以外の何物でもない。

11・12 闘争の巨大な意義を強固に定着させよ！  
破防法適用を中心とする敵権力の大弾圧の動きに対し、  
全大衆を結集して直ちに全力を挙げた反撃を準備し、敵の  
動きを打ち砕こう！

大学に対するそうさくには全大衆を結集して徹底抗戦の  
体制を築こう！

#### 八、日米会談を契機とする

##### 日帝の侵略加担を阻止せよ

日米会談から直ちに出てくるであろう結論は明きらかで  
ある。

それはベトナム侵略加担の強化以外の何物でもないだろ  
う。

日米会談を契機とする日帝の強化されるベトナム侵略加  
担を、より広範な大衆闘争とより強力な実力闘争をもって  
阻止していかうではないか。

○エンタープライズ寄港実力阻止

○三里塚空港設置実力阻止！

○四人の反戦アメリカ脱走兵を防衛せよ！

○ベトナム反戦を反帝反政府闘争へ！

○11・22 闘争を、破防法適用を中心とする敵権力の大弾圧  
の動きに対する反撃と、日米会談を契機とする日帝のベ  
トナム侵略加担の強化に対決する全大衆的闘争へと発展  
させよう！

○ベトナム・安保を闘いぬく実力闘争戦線をさらに拡大強  
化しよう！

(戦旗十一月十五日号)

## 理論的諸問題

### 70年安保Ⅱ日米反革命同盟の 強化を阻止せよ

8・6 広島反戦集会への呼びかけ

#### 共産主義者同盟政治局

八・六広島集会において、全国から結集する戦闘的労働  
者学生と共に、われわれが固く意志統一しなければならぬ  
課題は、次の四点である。

第一に、アジア階級闘争及び日本階級闘争の現局面（特  
にベトナム・アジア階級闘争に対するアメリカ帝国主義の  
支配力の限界の露呈によってひきおこされている事態）を  
鋭く明確にし、

第二に、その中で、七〇年安保が、激化するアジア階級

闘争と日本階級闘争に対する日米反革命同盟の強化という

本質的性格をもって登場しつつあることをはっきりと見き

わめて、七〇年安保を闘いぬく基本的展望を確立すること。

第三には、七〇年安保に向けて今秋の佐藤の訪ベトナム、訪  
米をもって急速に動き始めた敵の動向を暴露し「砂川基地  
拡張反対・ベトナム侵略反対」の闘いと共に、今秋の闘争  
の中心目標として「佐藤の訪ベトナム・訪米の阻止」を全体の  
ものとするのであり、

第四は地区反戦と全学連を両軸とする反帝統一戦線（左翼統一戦線）の形成と強化に全力を注ぎ、七〇年を目指して革命的潮流を日本階級闘争の公然たる部隊へと発展させていくために、社会民主主義と日共スターリン主義に対しいかなるかたちの党派闘争が要求されているかを明確にさせることでなければならぬ。

### 一 アジア階級闘争と 国際帝國主義

最近のアジア階級闘争の最も根本的な特徴は、ベトナム階級闘争に対するアメリカ帝國主義の支配力に限界が露呈しはじめていることである。

米軍のベトナム派兵四五十万懸勢が、ベトナム人民大衆の階級闘争に対して軍事的限界を露呈しはじめただけではない。

アメリカ資本主義の経済力もまた、ベトナム戦遂行と国防衛の矛盾にぶつかり出している。

さらにまた中東問題においてもアメリカ帝國主義の国際支配力の限界が暴露された。

ベトナム・アジア階級闘争に対するアメリカ帝國主義文

配力の限界性の露呈によって、日本帝國主義のアジア階級闘争における地位と反革命的役割が、いまや大きく浮かびあがってきている。

それだけではない。

まさに日本帝國主義の政治支配体制＝民主主義体制そのものの動搖が激化するなかで、アジア階級闘争の激化は、日本階級闘争に対して直接の影響をあたえる段階に入っているのである。すなわち、自国政治体制の動搖の激化に直面している日本帝國主義ブルジョアジーは、このようなアジア階級闘争の尖鋭化に対する危機感を深め、アジア階級闘争に対する政治的介入＝反革命的介入の必要に迫られている。ベトナム侵略に対する昨年の一こそ泥的加担」から「積極加担」への転換。そして京城における四カ国首脳会談から、秋の南ベトナム訪問と日米会談こそがそれだ。

そして、このような対アジア介入政策をもって、日本帝國主義ブルジョアジーは同時に国民再結集政策としようとしているのだ。

従って、いまや七〇年安保は、このような現に進行しているアジア階級闘争の激化と日本階級闘争の流動化に対す

る日・米帝國主義ブルジョアジーの反革命同盟の強化という本質的性格をもって登場してきている。

### 二 「七〇年安保」＝日米反革命 同盟の強化を阻止せよ

革共同中核派の幹部諸君は「六〇年安保を敗戦帝國主義から植民地帝國主義への転化、七〇年安保をもってさらに侵略帝國主義への転化」（何とまあ多種多様な日本帝國主義があることか！）と位置付けさらには、七〇年安保を単純に「再改定問題」としてとらえ、七〇年安保を六〇年との単純な類推でおしはかろうとしている。ここにバクローされているように、幹部諸君の致命的誤りは、第一に現時点における日帝ブルジョアジーの対外政策を、経済侵略一般としてしかみていないその経済主義的把握にある。

一方においてはアジア階級闘争に対するアメリカ帝國主義の反革命支配力の動搖を補強する形で、他方においては日本自身の政治支配体制の動搖からくるアジア階級闘争に対する危機感に促されて、日本帝國主義ブルジョアジーが急速に動き出しつつあるのはまさしくアジア階級闘争に対

する政治的介入＝反革命的介入（佐藤の南ベトナム訪問）に向かつてであり、単なる海外侵略一般ではない。

中核派幹部諸君の第二の致命的誤りは、現に進行しつつある日本階級闘争の転換を全然とらえていない点にある。

日本階級闘争の転換とは何か。

それはまず第一に、高度成長の行き詰まりと日帝ブルジョアジーの国内攻撃の激化に基づくブルジョア政治体制＝民主主義体制の動搖の開始であり、

第二には、このような民主主義体制の動搖と人民大衆の現状打開のエネルギーのうっ積に対し、日帝ブルジョアジーは行政執行権力＝暴力装置の強化をもって対応し、そこから攻撃を仕かけてきていることであり、

第三には、日帝ブルジョアジー＝自民党は、行政執行権力＝暴力装置の強化と攻撃をナシヨナリズムによって粉飾しつつ、同時にそのナシヨナリズムの下に国民を再結集しようとしていることであり、また自民党のナシヨナリズムへの国民結集政策の転換に対応して、社会党の結集政策もまた中道主義へと転換しつつあることだ。

このような日本階級闘争の転換＝動搖の開始をみよう

しない結果として、中核派幹部は、七〇年安保を六〇年の単純延長線上に考えてこと足わりとしているのである。

さらにマンガ的なことではその一部（清水丈夫君など）にいたっては、一七〇年は帝国主義の危機とスターリン主義の危機で決戦だなどというおそろしく単純な「七〇年決戦論」を言ってみたりしているのである。

こういうビエロ的な決戦論が出てくるのは、まさに日本階級闘争の具体的現実的転換をなにもみていないからである。

民主主義体制の巨大な動揺（議会の地位の低下と行政執行権力・暴力装置の決定的強化、ナショナリズムと中道主義への自・社両党の結集政策の転換）とアジア階級闘争の巨大な激化の中で迎える七〇年安保を、反帝闘争の一大焦点として闘いぬき、プロレタリア日本革命への展望を大きく主体的に切り開くこと——これこそがわれわれの七〇年にいたる基本任務ではないだろうか。

### 三 七〇年への布石 佐藤訪ベトナム

#### 訪米を阻止せよ

われわれははっきりと自覚し、また全体のものにしてい

を、処理・調整することによって七〇年安保へ向けての日米帝国主義ブルジョアジーの基本的調整を行うことをいみじくしているのである。

それだけではない。

佐藤内閣は、小笠原の全面返還・沖縄の部分返還をとりにつけることによって、あたかも日米安保体制は日本の国益につながるという粉飾を施し、そこからナショナリズムを推進することによって、国民大衆を自民党ナショナリズムの下に再結集しようとしている。そして、このようなナショナリズムの下への国民再結集をおして、彼等は七〇年に向けての政治的体制を固めようとしているのだ。

まさにこれこそが、七〇年安保に向けての具体的な政治過程なのであり（中核派幹部はこのような具体性に媒介さず七〇年への政治過程が始まったとただ抽象的にいっていきすぎない）従ってわれわれは、この秋の闘争目標として「砂川基地拡張反対」「ベトナム侵略反対」の闘いと共に「佐藤の訪ベトナム阻止」を明確に設定し、それに向けての意志一致と闘争体制の形成をかちとらねばならぬ。

かなければならないのは、七〇年安保に向けての日帝ブルジョアジーの動きが急速に開始されつつあること、七〇年安保に向けての日本帝国主義の基本的政治路線が固まり出していること、そして彼らの七〇年への決定的布石が、佐藤の訪ベトナムにあるという点である。

日帝ブルジョアジーの七〇年安保に向けての基本的政治路線の基礎は何か。それはベトナム侵略への公然たる政治的加担である。またそれと国内安定につき動かされた軍事力強化・核武装・海外派兵への策動である。

佐藤の南ベトナム訪問によってベトナム人民大衆の目前でアメリカ帝国主義の侵略に公然と加担し政治的テコ入れを行なうことにより、同時に彼らは日本帝国主義のアジア反共戦線における国際的地位を高めようとしているのだ。このようにアメリカ帝国主義のアジア支配の限界を補強し、それによる日本帝国主義の反革命的国際地位の向上をバックとして、日本帝国主義ブルジョアジーは日米会談において、七〇年安保に向けての日米間の具体的調整、特に沖縄・小笠原問題の処理を行おうとしている。

沖縄・小笠原問題の調整は「日米安保体制のアキレス腱」

#### 四 全学連、地区反戦を軸とする

#### 反帝統一戦線の強化へ

佐藤の訪ベトナム阻止する闘いを、七〇年安保に向けて反撃の突破口として闘いとり、さらに七〇年安保を反帝闘争の一大焦点として闘いぬきプロレタリア日本革命への展望を大きく主体的に切り開くためには、全学連・地区反戦を二つの主軸とする反帝統一戦線（左翼統一戦線）の全面的強化とその戦闘力の下への大衆の結集と形成に全力が注がなければならない。この課題に目をつぶり、反スタ闘いこみにきゅうきゅうとしているのが、わが中核派幹部である。

われわれは、このような反帝統一戦線（左翼統一戦線）の革命的指導部として、共産主義者同盟の不拔の建設・強化を闘いとらねばならない。

そして、七〇年を目指し、共産主義者同盟を日本階級闘争の公然たる革命的潮流・公然たる一推進力として登場させていこうではないか。

この事業は、社会民主主義、日共スターリン主義との断

固たる党派闘争をぬぎにしてはありえない。

また同時に、社会民主主義、日共スターリン主義両者と  
の断固たる党派闘争をぼやかしあいまいとさせている革命  
的左翼内部の小児病患者（とりわけ「社民美化論」と「社  
民との統一戦線論」に埋没している革共同中核派幹部）に  
対する断固たる党派闘争をわかれの任務とさせている。

#### 五、社民、日共とどう闘うか

中核派幹部は、「前進」七月四日号において労働運動の  
行き詰まりに対して「社民・組合幹部との具体的連帯」（  
美濃部支持の思想的背景）を提唱し、「七〇年安保に向け  
て社民的潮流との統一戦線」を「大胆に」（？）提唱して  
いる。わかれは、社民（指導部）のブルジョア民主主義  
的・ブルジョア平和主義的立場と連帯することは出来な  
い。

わかれが連帯し統一戦線を組織するのは、下部の大衆  
とであり、しかも大衆の不満と抵抗をほりおこすというわ  
かれの目的意識的活動をおしてである。

しかも現局面の日本階級闘争の動揺と転換の中で、社民  
の戦闘性（日本型社民論）に期待し依拠しようとするもの

全学連・地区反戦を両軸とする反帝統一戦線の下に大衆を  
結集し、その力をもって社民をつきあげる。

これこそが、社民に対する党派闘争の基礎であり、また  
日共スターリン主義が社民に中道主義への追随を基本性格  
としている今日このような社民に対する党派闘争の展開と  
それが同時に日共スターリン主義に対する党派闘争の基本で  
なければならぬ。

中核派幹部に代表される社民美化論の克服ぬぎにしては、  
社会民主主義・日共スターリン主義との断固たる党派闘争  
をおして、革命的な翼を日本階級闘争の公然たる潮流に  
発展させることはできない。

以上四点について、八・六広島集会に全国から結集する  
戦闘的労働者・学生と共に固い意志統一をはかろう。

それをもって七〇年安保への展望を打ち固め「砂川・ベ  
トナム・佐藤の訪ベトナム・訪米阻止」の秋の闘いに向けての  
決意を打固めよう。

八・五全国政治集会（於広島、共産主義者同盟主催）を  
土台として、八・六広島集会を闘争体制を打ちかためる大  
集会として闘いとう。

は「社民の美化」（美濃部支持）、「民同の裏切りの免罪」

（「前進」七月四日号の春闘総括、5・28砂川闘争での民  
同の闘争放棄に対する免罪）に転落する以外にない。

民主主義体制の動揺の始まった現在、すでに民主主義の  
枠を前提とした日本型社民の戦闘性、「体制内の戦闘性」  
の余地はなくなった。ここから、社民の手による労働運動  
の右傾化・無力化の危機が進むと共に、社民の中道主義へ  
の転換も始まっているのだ。

この社民と「具体的に連帯する」ということは、労働運  
動の無力化に手を貸し、中道主義議会路線に追随すること  
（美濃部支持ですでに中核はそれをやっている）であり、  
これこそまさに「自主独立路線」の名の下に日共スターリ  
ン主義がやりはじめていることである。

わかれは、社民の提起する大衆闘争に彼らのスローガ  
ンを主力闘争のスローガンに変形して介入する。そのスロ  
ーガンをもって、大衆の先頭に立ってつきあげる。

社民の闘争放棄と裏切りが公然として今日、わかれ  
は下部大衆の不満とエネルギーに依拠し下部大衆と共に  
その先頭に起って社民・組合幹部をつきあげ、闘いを迫る。

#### ☆ 七〇年安保に日米反革命同盟の強化 を阻止せよ

☆ 安保条約を破棄せよ

☆ 日帝の軍事力強化・核武装・海外派兵  
を許すな

☆ 日帝のベトナム侵略加担に全面対決せよ

佐藤の訪ベトナム・訪米を阻止せよ

砂川基地拡張実力阻止

沖繩の米軍基地を撤去せよ

公安条例即時撤廃

小選挙区制粉砕

ベトナム人民の解放闘争を支持し連帯せよ

☆ 七〇年安保を反帝闘争の一大焦点とし  
て闘いぬき、プロレタリア日本革命への  
展望を切り開こう

☆ 全学連・地区反戦を両軸とする  
反帝統一戦線を強化せよ

☆ 職場・学園に不拔の党を建設せよ

（戦旗七月十五日号）

# 日米会談後の 沖繩問題と沖繩階級闘争

## 1. 沖繩階級闘争の現段階

ベトナム戦争を中心とした情勢は、アメリカの世界戦略——とくに中国封じ込めを中軸としたアジア政策の要といわれる沖繩の位置を、一段と重要なものとしている。沖繩の返還については、いささかも幻想の発生する余地はない。にも拘らず、一連のアジア訪問外交・訪米とともに、佐藤政府は沖繩返還の幻想をふりまき、沖繩労働者人民をひきずりまわした。その狙いが、アジアへと舞台をひろげた日本帝国主義体制の強化、第三次防衛等自主防衛体制・核導入への国民結集政策にこそあることは、いまや明らかである。

だが戦後二十二年、アメリカ帝国主義の完全な占領下におかれ、本土から切り離され、その生活を破壊され、はかり知れぬ屈辱をなめてきた沖繩人民が、一方で佐藤政府のデマゴギーを知りながら、なおも今回の訪米にかけた本土復帰への期待は容易なものではない。基地沖繩の価値が米軍の軍事行動の完全な自由の保障にあるという事実は、裏をかえせば、農民の土地をとりあげ、基地労働者の搾取を強め、産業の破壊を強めることと同じであった。勿論こうした攻撃に対する沖繩労働者人民の闘いは飛躍的に進んできている。今日では米軍の無制約な基地拡張は、この抵抗闘争のため一大障害にぶつかっている。この力こそが、沖

繩の事実上の支配者・米軍政との対決を深めていること、ここに70年安保との関連で今日の沖繩問題が大きく登場してきたことはすでに何回も強調してきた(戦後九月十五日号)。

沖繩労働者人民はこのような闘いを中核としながら、祖国復帰を日米支配階級の会談に期待した。沖繩の現局面は、こうした期待が単なる論理上の問題として破綻したのではなく、圧倒的多数の労働者人民の胸の中で崩壊したことによって特徴づけられる。この闘いの前進はもはや米軍政への闘い、戦後一貫した抵抗を一段と発展させる以外にない。民族国家への復帰の要求は、労働者人民の米軍政打倒へと進む以外にない。

こうした段階は、必然的に復帰運動を左へと転換させずにはおかない。巾広い統一戦線組織である祖国復帰協自体、訪米への期待から、日米帝国主義への宣戦布告へと転換を開始した。こうした転換は米軍政の統治が、これへの斗争に死刑をもって臨むほどの圧制である以上、闘いの質の転換をもたらすだろう。もとより佐藤政府はこうした動向に對する必死のまきかえしを強めている。だが沖繩人民の圧倒的多数が抜本的な解決へと自らの歩みを進めていること

は否定できない。すでに十一月二〇日には十二万人のデモが組織された。

## 2. 日本帝国主義の沖繩政策

沖繩労働者人民の闘いが、米軍政に対する直接的な闘いへと大きく前進しようとするとき、改めて日本政府の動きが暴露されなければならない。小笠原返還と同時にミサイル基地設置を公表し、あるいは四三年中に沖繩返還のメドをつけることと宣伝すると共に返還後の沖繩防衛——自衛隊一万人の配置構想をうちあげるなど防衛庁の動きがめだっている。一方佐藤首相・三木外相も日本の東南アジア政策、あるいは自主防衛を精力的に宣伝している。こうした一連の動きは何を意味するのか。

戦後アメリカの極東政策の変遷は、核戦略・通常兵力の組合せの変化によって、いくつかの段階を経ってきたが、その中を一貫した傾向として日本の自主防衛が浮び上ってきた。この傾向は、ドル危機・ドル防衛強化と共に一層顕著なものとなった。アメリカのベトナム侵略拡大に伴う沖繩基地の重要性の確認と共に、アジアにおける日本の位置は



急速に変化してきている。

戦後の帝国主義世界体制は、経済的にはドル・ポンド体制として、政治的にはアメリカの圧倒的な軍事的優位として特徴づけられる。しかしポンド危機とイギリス帝国の崩壊に象徴されるように、その経済的地位の低下は、必然的に帝国主義的支配力・軍事力の低下に連なる。膨大な軍事力の維持とその国の経済力とは不可分である。

アメリカの地位の後退、ドル危機に伴う後進諸国経済援助の困難とその日本の肩代りの増加もまた、必然的に日米間に、こうした帝国主義的支配力の再編成の力学を生み出すにはおかない。それが日米「協調」として、あるいは日米安保条約下の軍事的・経済的分業の再編成として進められ、また日本帝国主義が対米貿易・対米同盟にその展望をかけているとしても、現に進行している再編成は、明らかに日米帝国主義国間の勢力関係の再編成である。沖繩・小笠原問題が、両帝国主義国間で軍事的な言葉で語られ、軍事的な問題として処理されていることは、この日米関係のひとつの段階をこそ示している。日本帝国主義にとって、アメリカの圧倒的優位の下での協調、条約的には変型双務協

日米会談・共同声明以降、沖繩の階級闘争は、急速に事態の本質に迫りつつある。あらゆる幻想をはがされた沖繩労働者人民にとって、その前にたふさがる敵はあまりにも明らかである。米軍政、それを補完する佐藤政府と沖繩におけるその手先がそれである。

こうした事態を予想し、またそれ故に沖繩を日米会談の主要議題とした日米帝国主義は、一方で佐藤政府の典型的な二枚舌、二・三年で解決のメドという宣伝を強めている。他方沖繩現地では、増大する米兵の犯罪への裁判の自主制拡大、経済援助強化、教公二法廃案、主席公選制等の譲歩策がとられている。

こうした問題は煮つめられている。政府のデマゴギーに屈服するの——この方向は当然運動内部の抑制がなければ不可能であり、琉球政府・沖繩民主党は必死に訪米の成果、本土との一体化をもって運動の二分化をはかっている。あるいはその抵抗闘争を、妥協のない米軍政への実力闘争、基地への全面的対決へと高めるのか。

沖繩現地買弁層の即時復帰反対運動、あるいは民社系労組の労働戦線分断工作等はいくつかの方向で

定（アメリカの日本防衛責任に基地提供をもて応える）という諸関係の改善は、外交の自主性の確立、独自の軍隊の保持とそのアジアを舞台としての自由な行動による以外にない。沖繩についての日米間の確認は、日本帝国主義にとっては、こうした基本方向への過渡の確認にほかならない。日本帝国主義にとっての沖繩問題の解決とは、日本帝国主義軍隊のアジアでの行動の自由の確立にほかならず、それにふさわしい国内体制の確立そのものである。日米共同防衛は、このような基本方向を内含した、日本とアメリカとの力関係が反映した共同のアジア政策そのものである。こうした沖繩労働者人民の要求貫徹・その勝利は、サンフランシスコ条約第三条の破棄はもとより、日米安保条約の破棄によってのみきり開かれる。この点をあいまいにし、例えば奄美大島方式といった線で返還復帰を構想するのは、基本的に沖繩を日米両帝国主義の取引き、さらには日本帝国主義の帝国主義的ナシ・ナリズムにその身をゆだねる途へと迷いこまざるをえない。

### 3. 沖繩と日本階級闘争

ある。にも拘らず圧倒的多数の大多数の人民は自らの手による解放へと進む方向をこそ要求している。社会党・人民党はこうした要求にこたえることをつきつけられている。

問題の基本的解決が、サンフランシスコ条約第三条破棄にあるということは、沖繩階級闘争に対する本土労働者人民の闘いの位置を極めて明確に示している。安保破棄への具体的プログラムとその闘争の実現、これ以外に沖繩との一体化された闘いはない。あいまいな共闘の名による慣例の署名・行進で、議会を通じて内閣に圧力をかける方向では、沖繩労働者人民の闘いにこたえることはできない。本土の基地拡張阻止の闘いも、あるいは原子力空母エンタープライズ寄港阻止の闘いも、70年安保破棄への階梯として、沖繩労働者人民の抵抗闘争と軌を一にしうる。

だが本土の最大野党たる社会党は、沖繩経済再建プランをこねまわし、政府の沖繩政策の危険性について国会内でおしゃべりする以外、何らの方法を持たない。日本共産党は暗黙のうちに沖繩現地の闘いと本土の闘いの同位性を目を閉じ、沖繩・本土共闘の美名で、本土での議会主義的展望を語るにすぎない。沖繩でのサンフランシスコ条約廃棄

の闘いがいかなる闘争を意味するのか、このことをつきつめなにかぎり、沖繩問題へのとりくみは、いぜん日米帝国主義の外交取引きの枠からすることはできない。

こうした事態は沖繩での闘いと本土の闘いと断層の拡大として作用せざるをえない。なぜなら敵と共に運動内部の自重を要求し、自治権拡大に唯一の道を求めることを要求しても、沖繩の労働者人民がこうした枠内にとどまる保障などありえないからである。

しかも世界階級闘争の現段階は、各国革命運動推進にあつたの相互不干渉という墮落しきつた公認共産党の指導をのりこえて、国際連帯の回復への巨大な前進をはじめている。沖繩・本土の闘いの一体化も、このような昂揚と無関係ではありえない。加えて、本土の労働者人民の闘いは、沖繩にこたえ、ベトナム労働者人民にこたえたと共に、自らの内部に日本帝国主義との非和解的な対決を拡大しつつある。日本帝国主義は、七〇年代にむけてその帝国主義的政策展開の負担を労働者人民の肩に転嫁する攻撃を一段と強めている。十、十一月闘争として闘われた羽田闘争は、このような攻撃を受けている労働者人民の怒りと連帯した

闘いであり、また沖繩労働者人民との深い連帯の中で闘われた。このような闘いへの敵の攻撃、そして実力闘争のよりの一層の拡大による反撃——われわれはこうした闘いによってあらゆる議会主義的幻想を排し、沖繩そして世界階級闘争との連帯を確立しなければならない。これこそ来るべき世界革命への道である。

(戦旗十二月五日号)

# 10.21 国際反戦闘争の

## 歴史的意義

昂揚局面をむかえる世界級闘争

十・二一国際反戦統一行動は、アメリカのベトナム侵略に反対し、この侵略行為に実力をもって立ちふさがろうと、全世界の労働者人民がたちあがった闘いであった。アメリカの国防省テモを頂点とする連日の徴兵拒否斗争、日本の羽田デモから十・二一への闘い、イギリス労働者の経済ストとウイルソン内閣へのベトナム侵略加担抗議の闘い。そしてベトナム人民の闘いに呼応した植民地、後進諸国労働者人民の拡大する武装ゲリラ斗争、等々である。

ベトナム戦争と世界体制の動揺

国際反戦闘争と「ベトナム」

昨年、日本の総評によって提起された「十・二一国際反戦統一斗争」は、ベトナム労働者人民の持久的、英雄的斗

いが継続する中で、いっそう鋭い斗いとして斗われた。

こうした斗いの拡大・発展を支えている現実的基盤は、  
いうまでもなくアメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争およびこれに対するベトナム労働者人民の英雄的革命戦争の持続にある。

こうした事態に対し世界の労働者・人民は、さまざまな組織的連絡をとり、この侵略に対する闘いをつよめ、十・二一闘争へととりこんで来た。こうしてこの闘いは、昨年よりも一層内容豊かなものとなり、またアメリカの侵略とこれへの自国政府の加担への実力闘争ともいうべき行動へとすすんだ。

だが、ここでわれわれは、こうした全世界労働者・人民の闘いが侵略をうけているベトナム労働者・人民へのたんなる同情に支えられたものとみるわけにはいかない。南アメリカの民族解放闘争やアメリカの黒人の闘いの中で、もう一つのベトナム々々と呼びかけ武装闘争を展開するゲリラも、この闘いの一翼である。徴兵拒否という国家への反逆や、ベトナムへの軍需物資輸送拒否の闘いも、この一翼である。侵略国アメリカでの闘い、侵略加担国日本

・イギリスでの闘い、そして未だ帝国主義と自国買弁政府の支配の重圧の下にある労働者・人民の闘い——こうした闘いは今日の帝国主義的支配に対する抵抗によって裏づけられているのだ。

### 米世界政策の破綻と 世界階級闘争の昂揚

全世界の労働者・人民の怒りを呼びおこし拡大しているアメリカのベトナム侵略は、いうまでもなくアメリカ帝国主義の世界政策に裏づけられた行動にほかならない。

アメリカは、戦後世界体制を自国のヘゲモニーのものとての軍事的経済的世界編成（対中ソ包囲体制による帝国主義国階級闘争および後進国民解放闘争に対する反革命的抑圧体制）として確立し、強力な支配を持続してきた。だがアメリカは、その支柱となつたドル体制の動搖に象徴されるように、今やその世界支配持続の条件を失いつつある。

EEC諸国、日本の擡頭は、明らかにアメリカの資本主義世界に対する経済的統括力を弱くくずした。巨大な軍事力とぼう大なドル撒布でアメリカ帝国主義が戦後新たにその支配下におさめた後進諸国の軍事的・経済的支配を、行き

詰まりつつある。「ドミノ理論」すなわち、ベトナムを失うことは全ての植民地・後進諸国の支配権を失うことだというアメリカ帝国主義の危機感、ますます現実的なものとなっている。それゆえにアメリカは、ベトナムに全力投球を続け、一定の利権をエサに日本帝国主義にたいしても一層の「協力」を迫っている。

しかもこの侵略戦争が長期化し、アメリカの、短期的にはもちろん長期的にも勝利的展望をとざされているという現状は、ベトナム侵略戦争がもたらすアメリカ国内における矛盾の激化としてはねかえっている。げいしい国際的な資本・商品競争の中での巨額の軍事支出とその増大——そのしわよせは黒人・青少年労働者に集中されている。

この黒人・青少年労働者はまた、ベトナムに派兵される兵隊にほかならない。

その地位が低下したとはいえ、いせんとして世界最強の帝国主義国であり、かつドル・ポンド体制によって世界資本主義の統一体制の中軸となっているこのアメリカの危機の深化は、同時にヨーロッパ、なかでもイギリス、西独、フランスをもとらえている。日本もまた例外ではない。は

げいしい資本・商品輸出競争戦、財政収奪と合理化、いっさいの矛盾の労働者人民へのしわよせ——こうした攻撃はいまや各国帝国主義に共通した現象となっている。そして植民地・後進諸国にとつてこうした傾向は、数倍するしわよせとなつてあらわれざるをえない。

### 武装解放闘争と実力抵抗闘争

こうして十・二一闘争は国際的な統一闘争として斗われた。だがこの斗いは、すでにみたように決して画一的なカンプニア闘争ではなかった。また公認スターリン主義者達が主張するように「労働者のみでなくより広い層も含んだ国際的広がり」にその最大の評価が下される性格のものでなかった。アメリカ、イギリス、日本でみられた「実力闘争」、この斗いの形態に共通するのは、議会主義の枠の中での意志表示にこの斗いをとどめることへの拒否である。公認の・既成の指導部の統制を拒絶した斗いとして斗われた抵抗闘争である。これはいうまでもなく各国の階級闘争全般を反映している。

さらにわれわれが注目しなければならないのは、こうした力学が、キューバ革命と、これを拠点とした南アメリカ

の反帝武装ゲリラ斗争の中に拡大されていることである。

そしてこのような斗いはアジアにも広がりがつつある。それはインドネシア(スカルノ)や、アラブ連合(ナセル)にみられた非同盟路線の破綻と鋭く対立している。後進諸国のブルジョア的発展の途が「ブルジョアジーとの同盟」路線によっても不可能なこと。ただプロレタリアートに指導された徹底的な旧制度の一掃こそが唯一の途であること――

。こうした御点から後進諸国の革命的プロレタリア人民はいっさいのブルジョア路線に反対し、これとの妥協政策を拒否するにいたっている。この動向は、必然的にソ連の平和共存路線の拒否に連なり、これを媒介とした左翼潮流の連合(OLAS路線)を生むにさえ至っている。

国内ブルジョア路線との闘いをすすめる「中国文化大革命」もまたこうした情勢への本格的な対応、すなわちブルジョア民族主義者との連帯路線の放棄と世界革命の根拠地という革命的インターナショナルリズムの再興を迫まられている。以下、十・二一をめぐる主要各国での階級斗争の現状についてみよう。

## 激化する欧米諸国の 反政府闘争

### アメリカー反政府 実力斗争の爆発

米国史上最大といわれたアメリカの反戦斗争の第一の特徴は、それが明確にジョンソンのベトナム政策に反対する反政府闘争として、しかも実力斗争をも含む大衆斗争として展開されたことである。

いうまでもなく、アメリカのベトナム侵略政策は、世界戦略の要をなすと同時に、国内結集政策の環そのものである。だが当初の「短期決戦」の夢は破れ、アメリカはベトナム階級斗争の泥沼に深く踏みこんで身動きがとれなくなっている。これこそ、戦後世界体制におけるアメリカ帝国主義の地位の凋落を端的に示すものであり、それと同時に、今や国内人民の結集政策も急速に破綻をきたしつつある。黒人暴動、学生を中心とする激烈な徴兵拒否斗争は、破綻したベトナム侵略政策をなおも強行せんとするジョンソン

政権に対する直接の抗議行動にはかならない。

そればかりではない。展望なき侵略の遂行は、ドル危機にあえぐアメリカ経済の負担を一挙に増大させ、ジョンソン政権は金融、財政機構をとおして国内収奪を本格的に開始した。そして戦時経済体制の徹底化は、自動車産業の不振とそこでの大規模な合理化攻勢をもたらし、また黒人にしわよせされている(黒人暴動、自動車労働者の大規模なストをみよう)。

ところで同時に考慮されるべきはアメリカの労働者階級は組合に組織されているながらも、独自の議会政党をもたぬことである。議会の軸をなすのは民主・共和二大ブルジョア政党の利害調整であり――しかも両者とも独自の綱領をもたず、多分に地域利害代表者の結集である――、プロレタリアートの要求はこの二大ブルジョア政党の政策に組み込まれているにすぎない。財界、軍部、官僚による大統領制執行権力、その補足としてブルジョア相互の利害の調整場所たる議会――これがアメリカの権力機構の基本である。従って、アメリカ労働者人民の「ベトナム侵略反対」の声は、せいぜい「ハト派」としてしか議会に反映されないの

である。

労働者階級は組合における経済闘争に力を注ぎ、むしろこの労働組合に守られることの少ない黒人労働者や青年労働者、そして徴兵にさらされる学生が中心となって政治闘争を展開していること、しかもそれが兵器工場や国防総省への激烈な「直接行動」として展開されていること、これらの特徴はアメリカの権力機構の特殊性に由来している。切実な「侵略反対」の声を反映させる場を持たぬアメリカ労働者、学生人民は、唯一残された「直接行動」の道をさらに突き進み、反政府闘争の一層の高揚をひきおこさずにはおかないであろう。

### 西独―大衆失業と高まる社民への不満

十月二一日、西ドイツではハンブルク、ミュンヘン、シュトゥットガルトの三都市で数千名の労働者・学生を動員して「ベトナム反戦」デモが展開された。これは、戦後ばかりで西ドイツでアメリカの政策に公然と抗議したデモとして、特筆されるべきである。もとより外見上、このデモはアメリカや日本と比べて激しいものではない。だが、しかし、

その底辺では、西ドイツ経済の深刻な不況に伴う失業者の激増、石炭、鉄鋼、自動車、建築部門の倒産の著増と人員合理化が進展しており、大規模な階級流動の序曲が始まっている。

西ドイツ経済は六匹、五年にかけてインフレ的拡大をへたのも、六五年末から六六年にかけて厳しい引締め政策に突入し、長期にわたる不況過程に入った。

エアハルト政権崩壊後に成立したキール・ジッガー大連立政権は、その性格からして、当然にブルジョアジーとプロレタリアートの双方に「色目」を使わざるをえず、たえず政策の動搖をくりかえさざるをえない。そしてまた社会民主党は、この動搖に「連帯」し、何ら積極的な打開策をプロレタリアートに示すことなく、結果的にはブルジョアジーの攻撃に労働者をさらしている。

失業者は一時は七〇万近くにふくれあがり、重工業独占体は、国内設備投資の不振を対外ダンピング輸出によってかろうじて切抜けているにすぎず、その負担は企業合理化、賃金カット、下請企業の切捨で、そして社会保障費削減となつてあらわれている。しかも現在の不況の焦点は、全国

して学生たちは、「ベトナム侵略者」の罵声をあびせ、卵を投げつけた。

だがより重要なのは、労働者階級本隊の労働組合の反政府的な反戦と、所得政策に反発する山猫ストの続発の二つである。

十月のイギリス労働党大会は、左派の提案した「アメリカのベトナム政策へのいっさいの連帯不可」の決議を過半数で採択し、ウイルソン政府の米ベトナム侵略への加担に不信感をたたきつけた。アメリカ世界政策への追随は第二次大戦後のイギリス帝国主義の不変の路線であり、ポンド危機を唯一アメリカのテコ入れでもとたえている現在、イギリス帝国主義の最大の生存条件の一つとなっている。これに対して与党が公然と不信感をたたきつけたことのもつ意義ははかりしれないほど大きい。

こうしたイギリス労働党左派のいちぢるしい反政府化、左傾化は、いうまでもなく、ここ一、二年のきびしい所得政策、賃金凍結の圧迫でうっせきしたイギリス労働者階級の不満の爆発に基礎をもっている。

イギリス帝国主義にとって、一九六〇年代にはいって漸

のエネルギー部門を支えているルール地方の石炭、鉄鋼であり、西ドイツ最大のRBA B（ゲルゼンキルヘン・ベルクウエル）さえ炭鉱閉鎖寸前である。

西ドイツ労働者階級は、一方では現状打開のエネルギーをうっ積させつつも、他方ではブルジョアジーの攻撃に決するための革命的指導部を与えられていない。ここから生ずる既成指導部に対する不満は、社会民主党の枠をのりこえて展開された十月二一日のベトナム反戦デモに組織された。反戦デモが広汎な組織労働者と学生を動員して行われたことは、いまだ明確な反政府斗争ではないにせよ、イギリスのように現状不満が反政府闘争へと転化する日の近いことを示している。

### イギリス労働党

#### 政府の侵略加担、賃金凍結に反響

イギリス階級斗争の最近の動きには、目をみはらせるものがある。

十月二一日のロンドンでは、トラファルガー広場の反戦集會に五百人が結集し、たいまつ行進が行なわれた。また、ケンブリッジ大学にはいろいろとしたウイルソン首相にたいして、ふたたび「ポンド切下げ」のうわさも出るほど深刻なポンド危機におちいった。労働党ウイルソン政府は、労働組合の反対をおしきって昨年七月いらい賃金の「完全凍結」にふみきった。

この賃金「完全凍結」の結果は二十数年来最高の失業者数と労働者の不満の増大であった。九月初めのTUC（英労働組合会議）の年次大会は「所得政策反対」決議を賛成四百八十八万票、反対三百五十万票で可決した。このあとの十月初めの労働党大会においても、所得政策否定決議は百三十万票差で否決されたといえ、労働党を真二つにする激論がたたかわされた。

いまや労働者階級は続々と山猫ストに立上りつつある。荷役労働者約九千人は九月十八日から無期山猫ストを続け、リバプール、ロンドンの両港には百五十隻の船舶が立往生している。鉄道労働者も十月十八日から非合法

トに突入し、一時は全英の鉄道がマヒするという事態を生み出した。下部組合員は労組指導部をのりこえて実カストに立上っており、指導部もこれを黙認せざるをえないのである。こうして昨年七月以降の賃金凍結はいまや無に帰し、ウイルソン政府は、ポンド危機を放置するかさもなくばよりの強力な所得政策を打出すかの選択をせまられている。こうした「所得政策」はけっしてひとりイギリスに特有のものではない。イギリス帝国主義の体制内につつまれておむっていたイギリス労働者階級の反政府・実力抵抗闘争へのけっ起は、帝国主義諸国の明日の姿を予示しているのだ。

## 日本プロレタリア ートの国際的任務

世界階級闘争の現局面は、以上のように全世界的な規模へと広がり、深まっている。帝国主義各国の労働者、人民の闘いは、明らかに共通性を帯びている。支配階級にとっでは、戦後支配体制すなわち、戦後民主主義体制そのもの

の行きづまりが基本的特徴であり、この苦境を脱却するための攻撃が労働者・人民に集中的にむけられている。そして、既成の労働者政党はこうした攻撃を議会主義的中道政権によってあたかも緩和し回避しようかのように考え、これに対し実力抵抗闘争が対抗的にもりあがっている。ベトナム労働者・人民の闘いは、一方で帝国主義の苦惱を一層おしすすめ、他方で全世界の労働者に反帝闘争をせまっている。植民地・後進諸国の労働者・人民はベトナム労働者・人民の道を選び、日和見主義との訣別をすすめている。10・21の各国の闘い、その中での実力闘争はこのような諸条件の中で闘われた。

日本の闘いも例外ではない。日本帝国主義がベトナム侵略加担を露骨につよめ、更にはアジア労働者人民に敵対する独自の帝国主義的野望を東南アジアに展望する行動をつよめていること、このことは日本の反戦闘争を一層鋭いものとする要因である。こうして10・21闘争は、10・8訪ベトナム阻止闘争、11・12訪米阻止闘争の中に位置づけられ闘われた。総評・社会党、そして日共が具体的な政府の加担阻止闘争からこの10・21闘争をたんなるカンパニア行動とし

(三十ページへ続く)

# 戦旗

共産主義者同盟機関紙

闘う労働者の新聞

「戦旗」を購読しよう！

旬刊毎月5, 15, 25日発行

購読料

(20回につき)

1部400円 (千共)

2部700円 (千共)

3部以上は一部につき300円 (千共)

## 共産主義

共産主義者同盟政治機関誌

No.8 (1966・12) 共産主義者同盟統一再建6回大会報告集

No.9 (1966・12) 流動する政治情勢と日本階級斗争、ほか

No.10 (1967 6) 特集・階級形成と前衛党

定価 No.8, 9は各200円, No.10は250円(千いずれも40円)

羽田闘争

1967年12月7日発行

¥100 (千40円)

東京都文京区湯島2-3-3 加藤ビル

戦旗社

振替 (東京) 26110

電話 (814) 1635 (代)

遠山美枝子  
所有